

都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第一冊

# 東 中 筋 遺 跡

—第1次調査—

2001年12月

高 松 市 教 育 委 員 会

## 目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 調査区の位置	5
第2節 基本土層	5
第3節 遺構・遺物	6
1) 弥生時代	6
1 土坑	6
2 柱穴	10
2) 古墳時代	11
1 溝	11
3) 江戸時代	13
1 掘立柱建物	13
2 柱穴	14
4) その他	14
1 噴砂	14
2 旧河道	14
第4章 自然科学的分析	29
第1節 東中筋遺跡の花粉化石	29
第5章 調査のまとめ	36
第1節 遺構の変遷	36
第2節 S R 1出土の木製農耕具について	37
第3節 焼夷弾について	37

## 例　　言

- 1 本報告書は、都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査地ならびに調査期間は、次のとおりである。

高松市桜町二丁目　　平成11年11月17日～平成12年1月31日
- 3 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施し、文化部文化振興課文化財専門員 小川賢が担当し、中西克也（讃岐文化遺産研究会）が補佐した。
- 4 本報告書の執筆は、第1章第1節を小川、第1章第2節・第2章・第3章・第5章を中西が行い、編集は小川・中西が行った。
- 5 第4章の花粉分析は（株）パレオ・ラボに委託し、報告をいただいた。
- 6 本報告書掲載の遺物写真撮影は杉本和樹（西大寺フォト）に委託した。
- 7 出土遺物ならびに図面・写真類は、高松市教育委員会において保管している。
- 8 発掘調査および整理作業・本報告書刊行にあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示・ご指導をいただいた。

香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 9 本報告書における表記および記述に関する凡例は、以下のとおりである。
  - (1) 遺構の略号は次のとおりである。

S B	・	掘立柱建物	S D	・	溝	S K	・	土坑	S P	・	柱穴
S R	・	旧河道									
  - (2) 遺構番号は調査時に付けた番号を廃棄し、整理段階で新たに設定した。下の表は遺構番号を変更した遺構のみ表記する。

報告書の遺構番号	調査時の遺構番号
SK2	SP40
SK3	SP16
SK4	SK2
SD1	SD2
SD2	SD3
SD3	SD1
SB1	SP1, 3~8
SP40	SP56
SP41	SP57

- (3) 遺物観察表の表記方法は次のとおりである。
  - 1 遺物の法量の中で（ ）を付いているのは残存値である。
  - 2 色調が内外面とも同じ場合には外面のみ表記する。
  - 3 土器胎土の粒土表記の基準  
　　微砂：非常に細かい　細砂：径0.5mm以下　粗砂：径0.5~1mm　細礫：径1mm以上
- (4) 遺物番号は通し番号とし、図版の遺物の数字は遺物番号である。
- (5) 本報告書で用いる高度値は海拔であり、方位は座標北である。
- (6) 本報告書の第2図「周辺主要遺跡分布図」の作成にあたり、国土地理院発行1/25,000地形図「高松南部」を使用した。
- (7) 図の縮尺は次のとおりである。

遺構	遺構配置図	1/400	S B	1/40	S D	1/40, 1/100	
		S K	1/20, 1/40	S P	1/20, 1/40	S R	1/80
		噴砂	1/80				
遺物	土器	1/2, 1/4	石器	1/2, 1/4	木製品	1/4	

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

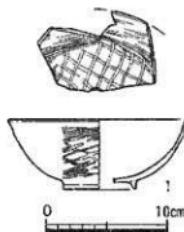
東中筋遺跡が所在する高松市桜町二丁目は、高松市北部に位置している。西に望む紫雲山の東麓には高松藩12万石が残した回遊式庭園があり、特別名勝栗林公園として高松隨一の名所となっている。

遺跡の現況は水田であるが、周辺部は市立学校や病院のある閑静な住宅地であり、また北部ではJR、私鉄駅や商業地等が広がり高松旧市街の南部に繋がる。近年では、高松を東西に横断する都市計画道路室町新田線の開通や移設してきた高松市保健センターを中心に市街化が一層進みつつある。

遺跡調査の契機となったのは、室町新田線から高松港の東部、東浜港へ南北に貫く都市計画道路東浜港花ノ宮線建設工事であり、工事が広範囲に及ぶため、事業の主管課である高松市都市開発部都市計画課の協力により事前の確認調査を実施した。

区間の北部となる既存の道路拡幅部分では、工事の工種に合わせて、隨時確認調査を行ったが、第1図の瓦器柄や弥生上器等の上器類以外は明確な埋蔵文化財を確認できなかった。区間の南部、新規道路建設予定地内では、平成9年度および平成11年度に実施した確認調査から弥生時代を中心とした埋蔵文化財の存在が明らかとなり、都市計画課と協議の結果、平成11年度で1,215m<sup>2</sup>、平成12年度で700m<sup>2</sup>を対象に本調査を行うこととなった。

本書（東中筋遺跡 第一冊）は、平成11年度に行った調査範囲について報告し、平成12年度の調査については、平成14年度に報告書（東中筋遺跡 第二冊）の刊行を予定している。



番号	器種	法寸(cm) （幅×底径×高さ）	形態・年代の特徴	色調	新土
1	土器 瓢	15.0 6.0 5.7	内丸微凸びき・底子剥離の特徴 BCY(17.5W/1)	青 灰	鉛白

第1図 試掘調査トレンチ出土遺物実測図 (S:1/4)

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成11年11月17日から平成12年1月31日まで実施した。

調査は、最初に現水田耕作土・床土と2面の近世条里型水田耕作土を重機により全面掘削し、土層観察と排水のための側溝を全壁にわたって掘削した。その後、地山直上に薄く残っている近世条里型水田耕作土を人力掘削し、遺構検出作業を行った。その結果、調査区北側にピット群が検出され、南側に溝・土坑・柱穴・掘立柱建物・近代の粘土探掘跡の遺構が検出された。調査区の中央部分は旧河道である事が確認された。

検査時の遺構配置図と土層図の作成後に、12月9日から南側の遺構の調査を開始した。まず、近代の粘土探掘跡を完掘し、SD1～3・SK1の調査を行った。SD1の底面にSK2が検出された。SK1～3は完形の上器が出土し、十層図・平面図を作成し、写真撮影を行った。SD1の平面図を作成後にSK4の掘り下げを行った。柱穴を完掘し、調査区南側の調査を終えた。12月15日からSR1の掘り下げを開始し、1月22日に終了した。SR1の南岸では弥生土器・上師器・須恵器の上器が大量に出土したため、土層毎に掘削し遺物の取り上げを行った。河床では縄文時代晚期～弥生時代前期の土器と木製品が出土した。1月19日に北岸斜面で焼灰跡の一部が出土した。1月22日に調査区北西部に検出した遺構の調査を終えた。24～26日は雨のため調査は中止となった。27・28日に航空写真測量の準備を行い、29日は航空写真測量の後に個々の遺構の写真撮影を行った。31日にSR1の土壤サンプルを取り、調査を終了した。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており、そのため平野周囲の山塊のように侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）、あるいは、平野内部に見られる由良山等の孤立丘（ビュート）となっており、高松平野の自然環境を特徴付けている。

高松平野は、完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から流下し、瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ、本津川、春日川、新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は、17世紀に人工的に固定されたもので、それ以前には石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する流路も存在していた。この旧流路は、現在では水田および市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林町から木太町へかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査によってもその痕跡が確認されている。

本遺跡が所在する高松市街の中心に近づくにつれて、傾斜が緩やかになっており、ここには海岸に沿って東西に延びる微高地の砂堆が形成されており、海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば、栗林公園付近から松郷町、久米池より北側では海成層の存在が確認される。高松市街付近では、現地表面下10~12m以浅が最終氷期末以降の堆積物であると推定できる。本遺跡に東隣する桜町中学校でのボーリングデータでは、現地表面下3mまではシルト質砂、3~7mは粘土、7~8mはシルト質砂、8m以下は礫となっている。この現地表面下8mが沖積層と洪積層の境であり、これより上が最終氷期末以降の堆積物である。

### 第2節 歴史的環境

東中筋遺跡が所在する高松平野では、近年の大規模開発に伴う発掘調査によって多くの遺跡が調査され、少しづつではあるが遺跡の状況がわかつてきた地域である。おおまかではあるが、各時代を追って遺跡の状況を見ていきたい。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代にさかのぼる。平野西南部の中間西井坪遺跡ではA T火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。このほか、香西南西打遺跡や雨山南遺跡、久米池南遺跡などの平野縁辺での出土が目立ち、平野中央部では今のところ知られていない。

縄文時代では、大池遺跡で草創期と見られる有尖頭器2点の表様が報告されている。中期では、井手東I遺跡においてアカホヤ火山灰の堆積層が確認されており、高松平野の形成過程をうかがうことができる。晩期になると旧河道出土遺物であるが、林・坊城遺跡、居石遺跡等で土器や木製品の出土が知られている。

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増加する。前期の環濠集落として知られる天満・宮西遺跡、中期ではさこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡が見られる。後期では十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を作った天満・宮西遺跡があげられる。これら集落遺跡の他に、さこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡、弘福寺領田北地区比定内遺跡では小区画水田を検出している。

古墳時代では、弥生終末期から続く上天神遺跡、回原遺跡、空港跡地遺跡で初頭の集落、太田下・須川遺跡では中期の集落を検出している。生産関連の遺跡としてはさこ・松ノ木遺跡の水田、三谷三郎池の須恵窯跡、中間西井坪遺跡の土師質陶棺焼成土坑が知られるが、古墳時代全般を通じて集落は

希薄である。一方古墳は、ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。その中心的存在である石清尾山塊古墳群は頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後、盛り上の群集墳が爆発的に盛行する。積石塚は、2基の双方中円墳と9基の前方後円墳で構成される。鶴尾神社4号墳は発生期の古墳として著名であり、群中最大の猫塚古墳は双方中円墳という特異な墳形であり、複数の埋葬施設を有する。石船塚古墳は後円部中央に削抜式石棺を有する。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。中でも松縄下所遺跡は地表条里と同方向の道路状遺構を検出し、時期も7世紀代までさかのぼり得るなど、高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また、日本最古の莊園田図として名高い「弘福寺領讃岐国山田郡田図」の北地区比定地が大池周辺に存在する。やや位置的に外れるが、この田図と同時期の井戸が発見された遺跡として木太本村II遺跡があげられる。古代寺院跡では宝寿寺跡、山下廃寺、下司廃寺、高野廃寺、押御廃寺、坂田廃寺、多肥廃寺、勝賀廃寺などが知られている。

中世では、城館が多数知られている。東中筋遺跡の東側の木太町には神内氏の神内城が存在する。木太南小学校の校庭が比定地であり、調査の結果15~16世紀の遺物を包含する幅2.6mの溝が確認されている。神内城の東側、白山神社古墳を挟んで土壘状の遺構が残る真鍋氏の向城が知られている。神内氏は十河氏方、真鍋氏は香西氏方の部将で、数百メートルしか離れていないところに城を築いていることが特徴的である。松縄町の天満・宮西遺跡に東隣して松縄城が存在している。また、伏石町のキモンド一遺跡においては、佐藤氏の佐藤城の堀を検出している。さらに日を西に転じれば、西ハゼ町の西ハゼ土居遺跡では、堀や塀を巡らした屋敷が3棟検出された。最大の屋敷は約44m<sup>2</sup>、中規模のもので約33m<sup>2</sup>、小規模のもので約22m<sup>2</sup>と推定される。最大の屋敷地の堀から日用雑器に加え瓦や青磁が出土した。

近世では、東山崎・木田遺跡、川南・東遺跡、川南・西遺跡において、春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡が検出されている。また、近世は大規模な土木工事の時代でもあった。特に西嶋八兵衛による香東川の付け替えと共に関連して木太町周辺の干拓と新田開発が注目できる。後に松平頼重によりさらに北側の干拓が行われ、ほぼ現在の海岸線となった。しかしながら低地であることから、1710年、1722年、1866年の大風雨において春日川や新川の決壊が起こり、多大な被害が記録されている。現高松市美術館の紺屋町遺跡では陶磁器や木簡が出土し、高松城東ノ丸跡や地久櫓台、三ノ丸跡、サンポート高松整備に伴う埋蔵文化財発掘調査において石垣や建物礎石などの遺構が検出され、往時の城下町の姿が次第に明らかになってきている。

## 参考文献

- 秋山 忠 1982 『古城跡を訪ねて』 高松市歴史民俗協会  
高松市教育委員会 1992 『讃岐国弘福寺領の調査』  
香川県教育委員会 1992~96 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第1~6冊』  
高松市教育委員会 1993~95 『一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1~7冊』  
濱田重人 1993 「高松市木太町大池遺跡表探の有舌尖頭器」『香川考古 第2号』香川考古刊行会  
香川考古刊行会 1994 『香川考古 第3号 特集:香川の中期古墳』  
高松市教育委員会 1996 『讃岐国弘福寺領の調査II』  
香川県教育委員会 1998 『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 木太本村II遺跡』  
高松市教育委員会 1998~2001 『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1~4冊』  
高松市教育委員会 1999~2000 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第1~2冊』



- |              |               |             |             |
|--------------|---------------|-------------|-------------|
| 1. 東中筋遺跡     | 2. 稲荷山姫塚      | 3. 西ハゼ土居遺跡  | 4. 松並・中所遺跡  |
| 5. キモンドー遺跡   | 6. 天満・宮西遺跡    | 7. 松繩下所遺跡   | 8. 境目・下西原遺跡 |
| 9. 上西原遺跡     | 10. 弘福寺領田図比定地 | 11. 大池遺跡    | 12. 上天神遺跡   |
| 13. 太田下・須川遺跡 | 14. 蛙股遺跡      | 15. 居石遺跡    | 16. 井手東II遺跡 |
| 17. 井手東I遺跡   | 18. さこ・長池II遺跡 | 19. さこ・長池遺跡 | 20. 渋仏遺跡    |

第2図 周辺主要遺跡分布図 (S : 1/25,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査区の位置

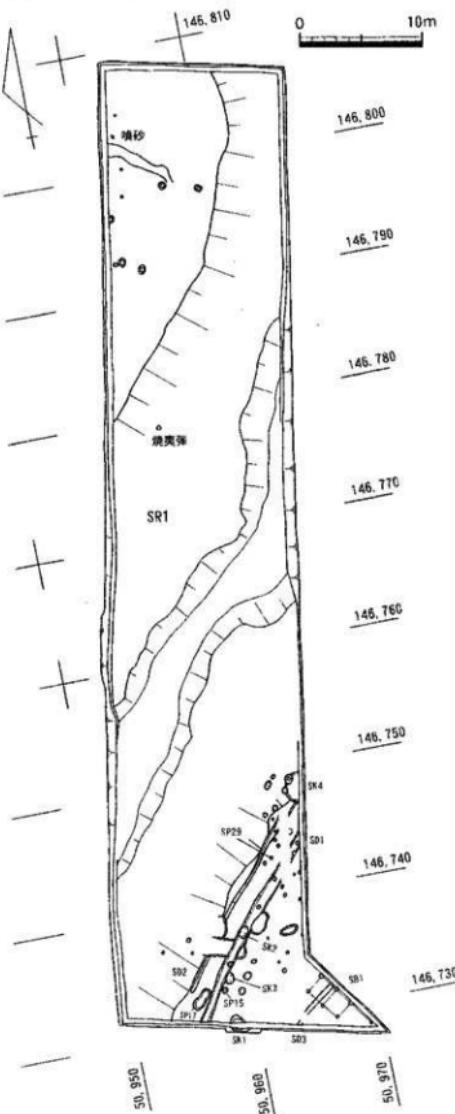
東中筋遺跡が位置する桜町二丁目は市街化の著しい区域であるが、その中に水田がわずかに営まれている。東中筋遺跡は、都市計画道路室町新田線と高松琴平電気鉄道琴平線が交差する踏み切りを東へ50m行った水田に所在し、北東側には桜町中学校と高松第一高等学校がある。さらに、約250m東には御坊川が北東方向に流れている。遺跡周辺の水田の標高は6.60mであり、南から北に向かって緩やかに低くなっている。

調査区は道路建設に伴う発掘調査であるため南北方向に細長く設定され、南端は都市計画道路室町新田線と接する。全長は79m、幅は16mを測る。調査区の南端部は交差点になるため幅が30mになり、東側と西側に調査区が三角形に拡張するが、西側は進入道を確保する必要から未調査部分となっている。

### 第2節 基本土層

旧河道を除く微高地の土層堆積は次のとおりである。最上位は現水田耕作土であり、厚さは約20cmである。その下には1面ないし2面の近世条里型水田耕作土の淡黄色シルト質極細砂が堆積し、その下は遺構確認面の地山となる。調査区の南東部ではこの層が堆積しておらず、現水田耕作土の直下は地山となる。

旧河道の土層堆積は、第3節で詳細に述べるが、埋没後の凹地に土層の堆積が多く見られ、水田の耕作土が検出されている。



第3図 遺構配置図 (S : 1/400)

### 第3節 遺構・遺物

#### 1) 弥生時代

##### 1 土坑

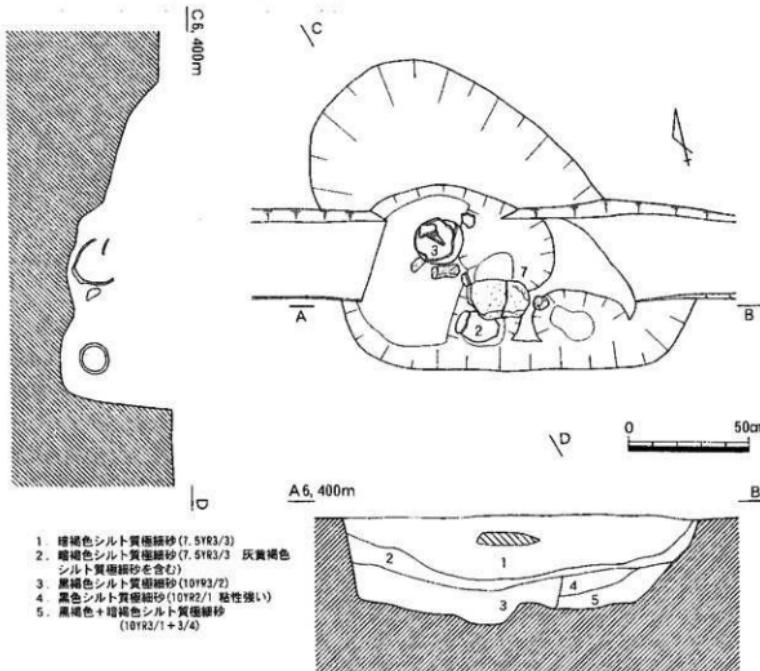
###### SK 1 (第4・5図)

調査区南端中央において単独で検出された土坑であり、中央部は側溝の掘削により一部消滅する。

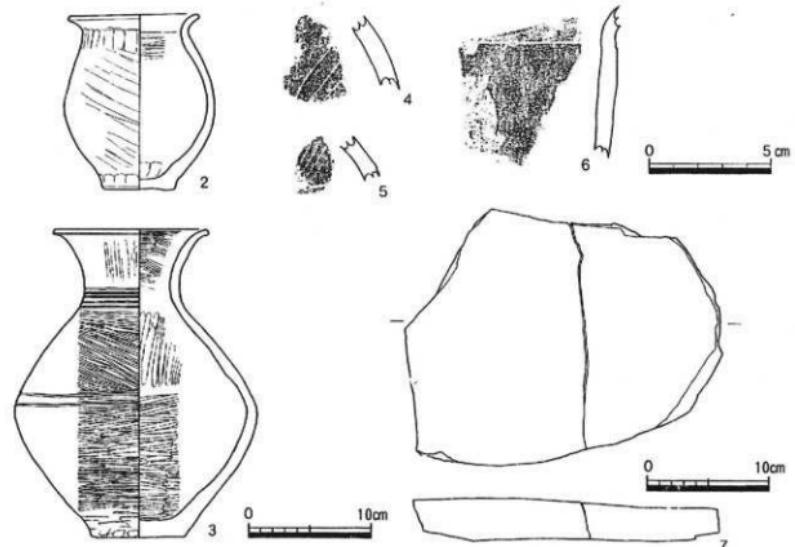
検出面のレベルは標高 6.34m である。土坑の平面形は南側が直線をなす不整な楕円形を呈する。南北方向の長軸は 1.30m、東西方向の短軸は 1.16m を測る。確認面からの深さは最深部で 0.44m である。北半部の掘り込みは緩やかな傾斜であるが、南側は非常に急傾斜でありほぼ垂直に掘り込まれている。底面も不整な楕円形を呈し、中央部にわずかな落ち込みがある。埋土は 5 層に分層されるが、1・2 層と 3～5 層に大別される。その堆積はレンズ状堆積である。

遺物は、弥生土器壺 (2～5)，同甌 (6)，石製品 (7)，その他の弥生土器片である。土器の時期は弥生時代前期であると考えられる。

2 は小型の壺でほぼ完形であり、口縁部は短く外反する。口縁部は横ナデ・横方向のヘラナデが施され、胴部外面下半に楕円形の黒斑がある。3 はほぼ完形の広口壺で、頸部外面に 5 条の籠描沈線、胴部外面中央に 2 条の籠描沈線が廻っている。胴部外面と口縁部内面、胴部内面下半はヘラミガキ、口縁部外面はナデ、胴部内面上位は指ナデが施される。4・5 は胴部上位の破片で、木葉紋がある。6 は胴部上位片であり、外面に沈線を有する。



第4図 SK 1 平・断面図 (S : 1/20)



番号	器種	法寸(cm)			表面・手法の特徴	色調		胎上
		II径	底径	高さ		外	内	
2	弥生土器 罐	10.2	5.6	14.4	外面施ケズリ・ナデ 内面施ナデ・ナデ	灰青 2.5Y7/2	褐色	
3	弥生土器 罐	12.4	7.6	25.1	外面施ナギ・無施皮痕紋 内面施ナギ・ナデ	褐色・青緑 10YR6/3	無い・真程 10YH7/3 青緑～緑縞	
4	弥生土器 瓶	13.0	7.0	14.0	外面施ナギ・無施紋 内面ナギ	褐色・青緑 10YR6/3	無い・真程 10YH7/2 石灰・灰・角閃石	
5	弥生土器 瓶	11.0	6.0	14.0	外面施ナギ・無施 内面ナギ	褐色・青緑 10YH7/3	灰色・灰・角閃石	
6	弥生土器 瓶	10.0	5.0	14.0	外面施ナギ・無施 内面施ナギ	褐色 2.5Y7/3	灰色・灰・角閃石	珪化・金葉粉
7	石材	25.8	20.7	3.4	3125.0	砂岩	片面は滑らかである	

第5図 SK 1出土遺物実測図 (S : 1/2, 1/4)

#### SK 2 (第6・7図)

調査区南側において検出された土坑であり、上面はSD 1によって削平されている。

この土坑はSD 1完掘後に検出されたため、確認面のレベルは標高6.15mである。現存する平面形は梢円形を呈し、その規模は、南北方向の長軸で1.02m、東西方向の短軸で0.59mを測る。確認面からの深さは0.14mである。掘り込みは非常に緩やかであり、底面との境は不明瞭である。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色と暗褐色シルト質粘土細砂の單一層である。

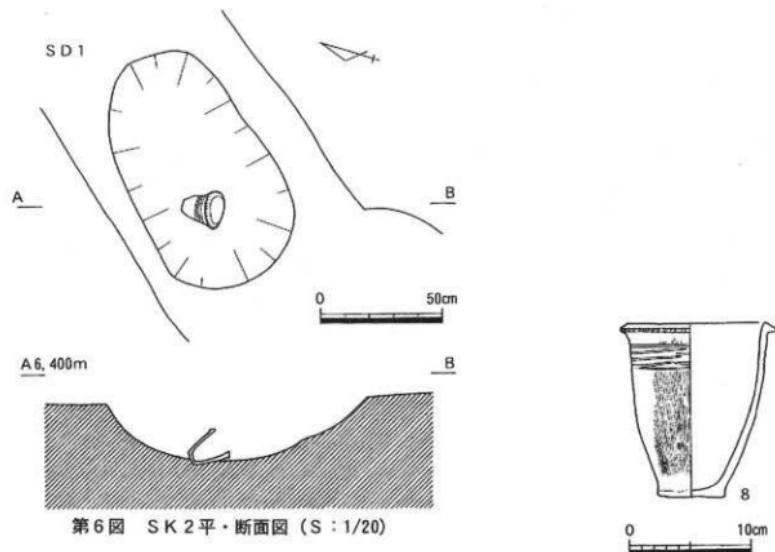
遺物は、弥生土器甕(8)、その他の弥生土器片数点である。土器の時期は弥生時代前期である。

8は完形の小型甕であり、土坑の南寄りの底部直上より出土した。口縁部の直径は14.2×12.7cm、底径は5.9×5.1cm、器高13.5~14.2cmを測り、左右非対称の形態をなす。口縁部は逆し字状口縁をなし、胴部外面上位に4条の筐描沈線を巡らす。沈線は螺旋状に描かれており、土器の正面位に沈線の接点が見られる。口縁端部外面に刻目が施される。胴部外面は縦方向の刷毛目、内面は筐ナデが施される。底部周縁部はナデが施されるが、中央部は未調整である。

#### SK 3 (第8・9図)

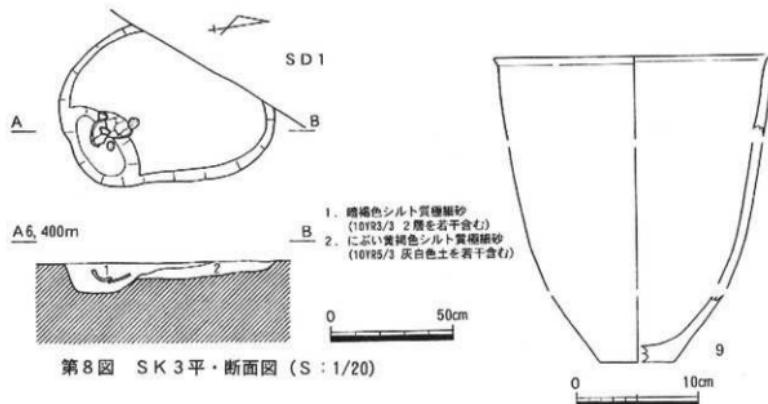
調査区南側において検出された土坑であり、SD 1に土坑の北西部部分は切られている。

確認面のレベルは標高6.31mである。平面形はやや不整な梢円形を呈し、その規模は、南北方向の



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		地土
		口徑	底径	高さ		外	内	
8	赤朱土器 壺	11.6	5.9	14.2	外面刷毛目・底部沈殿有り 頂端側に削目状	淡黄 2.5YR 8/3	灰白 2.5YR 8/2	石英・長石・角閃石

第7図 SK 2 出土遺物実測図 (S : 1/4)



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		地土
		口徑	底径	高さ		外	内	
9	赤朱土器 壺	23.8	6.9	25.0	内外面ナメ 外面一定厚さガタリ	鈍紅 7.5YR 6/3	灰い青白 10YR 7/4(石元・鉛鉄～錫鉄)	

第9図 SK 3 出土遺物実測図 (S : 1/4)

長軸で0.88m、東西方向の短軸で0.65mを測る。確認面からの深さは0.07mを測り、底面はほぼ平坦である。底面の南端部に楕円形の落ち込みがあり、最深部の深さは0.13mを測る。掘り込みは緩やかであり、断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色シルト質極細砂とぶい黄褐色シルト質極細砂であり、前者が南端部の落ち込みに充填されている。

遺物は、弥生土器甕(9)、その他の弥生土器数点である。土器の時期は弥生時代前末期である。

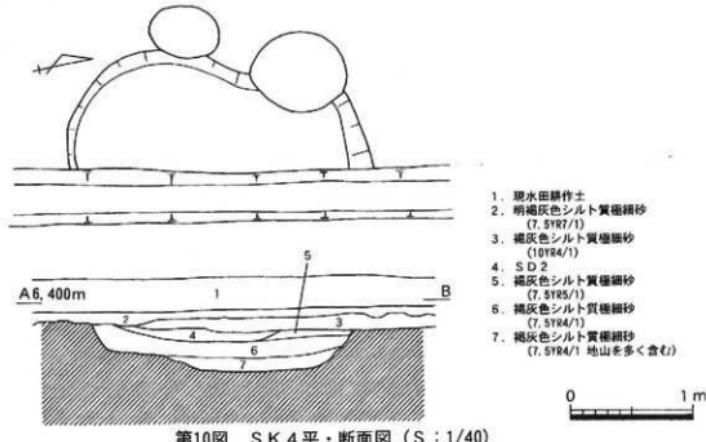
9は土坑の南端部の埋土中位より出土した甕であり、胴部の中央部分を欠損する。推定の器高は25cmである。口縁部はわずかに外反し、いわゆる「如意状」口縁であり、胴部は無紋である。

#### SK 4 (第10・11図)

調査区の南側で検出された土坑であり、SR 1の南岸を掘り込み、SD 2と2個のピットに切られている。土坑の東側は調査区外に延びている。

確認面のレベルは標高6.17mである。検出された範囲の平面形は不整な楕円形を呈し、南北方向の長軸は2.45m、東西方向の残存長は0.98mを測り、確認面からの深さは最深部で0.40mである。掘り込みは急傾斜であるが、北側は若干傾斜が緩やかになっている。底部は中央より北側が深くなっている。埋土はわずかに色調の異なる3層の褐灰色シルト質極細砂であり自然堆積を呈する。

遺物は、弥生土器甕(10・11)、同甕(12)、その他の弥生土器片である。土器の時期は弥生時代前期である。



第10図 SK 4 平・断面図 (S : 1/40)

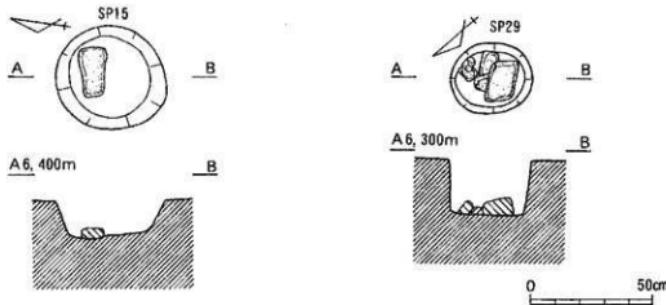


番号	器種	法寸 (内径) 10	法寸 (外径) 10	特徴 11	色調		地土
					外	内	
10	弥生土器 甕	9.0	9.3	内外面無	黒・褐	7.5V8/7	灰黒色10V8/6/2 粘物多量
11	弥生土器 甕	—	—	内外面テグス 外面無	黒・褐	7.5V8/4	黒・褐 10V8/7 石質・粘物多量
12	弥生土器 甕	—	—	内外テグス 内面テグス	黒・褐	7.5V8/3	黒・褐 10V8/6 石質・粘物多量

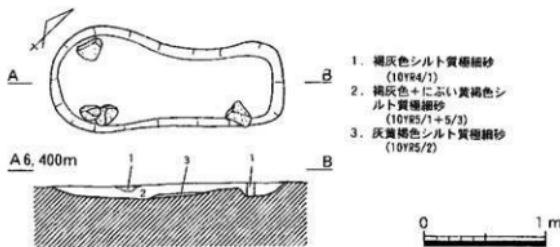
第11図 SK 4 出土遺物実測図 (S : 1/2, 1/4)

2 桂穴 (第12・13図)

遺構名	位置	平面形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	確認面の場所	堆土	備考	報告書
SP12	南側	円形	0.42		0.31	6.26	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP13	南側	椭円形	0.62	0.54	0.05	6.26	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP14	南側	不規則円形	0.61	0.51	0.03	6.25	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP15	南側	円形	0.41		0.15	6.29	暗褐色シルト質粘土細砂	底面に礫石が残存	○
SP17	南側	不規則円形	1.94	0.86	0.12	6.25	暗褐色シルト質粘土細砂	4個の川原石	○
SP22	南側	円形	0.45		0.32	6.18	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP23	南側	円形	0.21		0.18	6.16	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP24	南側	円形	0.26		0.33	6.29	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP27	南側	円形	0.36		0.38	6.22	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP78	南側	円形	0.36		0.21	6.23	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP79	南側	円形	0.33		0.22	6.23	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP33	南側	円形	0.37		0.02	6.11	暗褐色シルト質粘土細砂	底面に礫石が残存	○
SP34	南側	椭円形	0.39	0.26	0.02	6.11	SDIに削平される		
SP35	南側	円形	0.34		0.11	6.09	暗褐色シルト質粘土細砂	SDIIに削平される	
SP36	南側	円形	0.51		0.11	6.11	暗褐色シルト質粘土細砂	SDIIに削平される	
SP37	南側	円形	0.32		0.19	6.22	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP38	南側	円形	0.22		0.18	6.22	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP39	南側	円形	0.19		0.15	6.21	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP42	南側	不規則円形	0.42		0.08	6.11	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP43	南側	不規則円形	0.47		0.29	6.15	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP44	南側	椭円形	0.72	0.41	0.03	5.91			
SP45	北西側	円形	0.49		0.16	5.98	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP46	北西側	不規則円形	0.68	0.58	0.06	5.98	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP48	北西側	不規則円形	0.66		0.06	6.02	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP49	北西側	円形	0.49		0.16	5.98	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP50	北西側	円形	0.61		0.13	6.01	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP55	南側	円形	0.38	0.28	0.06	5.92	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP56	南側	不規則円形	0.57		0.19	5.94	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP57	南側	不規則円形	0.77		0.29	5.88	暗褐色シルト質粘土細砂		
SP58	南側	円形	0.39		0.02	6.11			
SP59	南側	円形	0.48		0.12	6.07			
SP60	南側	椭円形	0.41	0.26	0.05	5.91			



第12図 S P15・29平・断面図 (S : 1/20)



第13図 S P17平・断面図 (S : 1/40)

## 2) 古墳時代

### 1 溝

#### SD 1 (第14・15図)

調査区の南側において検出された溝であり、SK 2・3、SP 22・27・33・35を切っており、近代の瓦用の粘土採掘跡により上面を削平される。溝の北端には試掘トレンチが掘削されている。

検出面のレベルは標高 6.25m 前後である。溝の方位は N-40°E を示し、SD 2 と平行して延びており、SR 1 の南岸ともほぼ同方向である。検出した全長は 17.90m、幅は 0.60~0.93m を測る。確認面からの深さは 0.07~0.15m である。溝の掘り込みは非常に緩やかであり、断面は U 字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなっている。南端の標高は 6.19m、北端では 6.11m である。埋土は灰色シルト質極細砂の 1 層と灰色+黄灰色シルト質極細砂の 2 層に分層されるが、2 層は底面に薄く堆積するのみである。

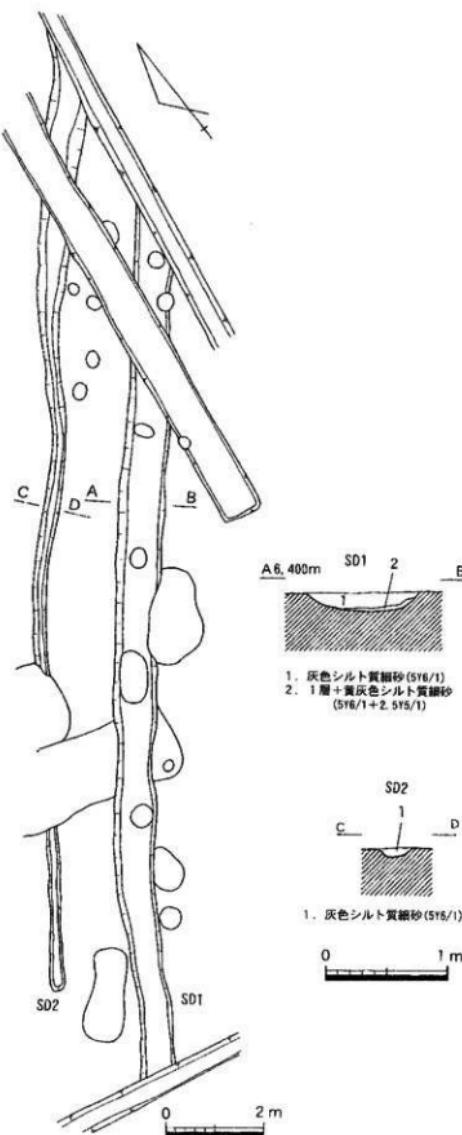
遺物は、上師器壺 (13・14)、須器杯身 (15)、同高杯 (16)、弥生上器甕 (17) である。

13・14 は壺の口縁部であり、内外面とも摩滅し調査は不明である。13 は大きく外反し、口縁端部はやや角ばる。14 は内面に段を持ち、口縁端部が若干尖る。

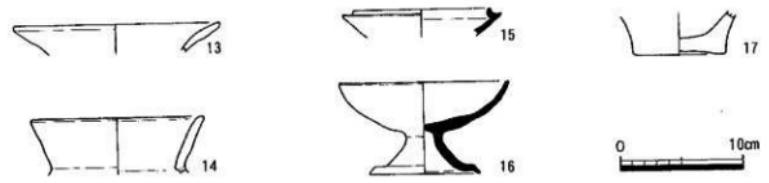
15 は器高の低い杯身であり、斜めに延びる受部から内傾する無い口縁部が付いている。

16 は口径に対して器高の低い高杯であり、杯部は浅い半球形を呈し、口縁端部はやや尖る。脚部は短く大きく広がり、脚裾部は明瞭な段を持ち立ち上がる。15・16 はその器形の特徴から 7 世紀初頭のものと考えられる。

17 は弥生土器の甕底部であり、混入したものである。底部は若干上げ底である。内外面とも摩滅しているが、内面に部分的にナデが残存する。

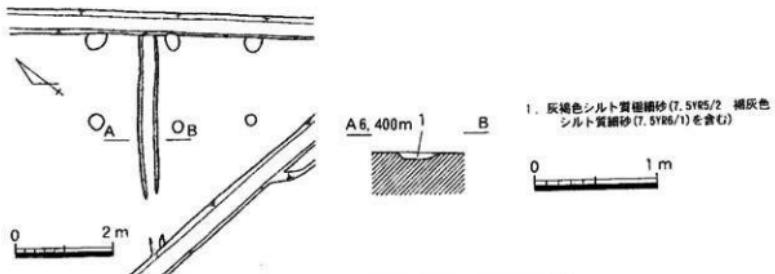


第14図 SD 1・2 平・断面図 (S : 1/40, 1/100)



番号	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴	色調		胎土
		内径	底径		高さ	外壁	
13	土器部 容	16.8	—	(2)④ 山腹窪は魚頭ら 伏れ立脚盤 内側窓有	灰褐色 7.5YR6/4	高い黄緑 10YR6/6 赤・細砂	
14	土器部 容	14.0	—	(4.6) 1枚底窓有 内側窓有	灰褐色 10YR6/2	高い黄緑 10YR7/3 赤・細砂	
15	土器部 朴身	11.0	—	2枚窓ナラ	灰褐色 7.5YR7/2	暗緑	
16	須恵器 直井	12.8	9.0	7.4 輪形ナラ 窓有	灰褐色 10YR6/2	高い黄緑 10YR7/4 石英・貝ビ多量	
17	骨生土器 頭	7.4	—	(3.5) 内面堅誠、内面堅誠するが一箇にナラ	灰褐色 10YR6/2	高い黄緑 10YR7/4 石英・貝ビ多量	

第15図 SD 2出土遺物実測図 (S:1/4)



第16図 SD 3平・断面図 (S:1/40, 1/100)

### SD 2 (第14図)

調査区の南側においてSD 1の西側で検出された溝であり、SK 4とSR 1の南岸を切っており、近代の瓦用の粘土採掘跡により上面を削平される。溝の北端には試掘トレンチが掘削されている。

検出面のレベルは標高 6.25m 前後である。溝の方位はN-40°-Eを示し、SD 1と平行して延びており、SR 1の南岸ともほぼ同方向である。SD 1とSD 2の距離は芯芯間で 1.75~2.00m を測る。検出した全長は 18.70m、幅は 0.20~0.90m を測り、南側になるにしたがい幅は広くなっている。確認面からの深さは 0.02~0.10m である。溝の掘り込みは非常に緩やかであり、断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなっている。南端の標高は 6.21m、北端では 6.09m であり、その比高差は 0.12m である。溝北側の底面直上から拳大の石が数個検出された。埋土は灰色シルト質極細砂の単一層である。

遺物の出土は非常に少なく、数点の土師器片・須恵器片のみであり、図化できるものはなかった。

### SD 3 (第16図)

調査区の南東側において検出された溝である。

検出面のレベルは標高 6.24m 前後である。溝の方位はN-50°-Eを示し、溝の南側は長さ 0.80m が後世の削平を受けているが、検出できた全長は 4.40m、幅は 0.40m を測る。確認面からの深さは 0.07m である。溝の断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなっている。南端の標高は 6.19m、北端では 6.17m である。埋土は灰褐色シルト質極細砂である。

遺物の出土は非常に少なく、数点の土師器片・須恵器片のみであり、図化できるものはなかった。

### 3) 江戸時代

#### 1 掘立柱建物

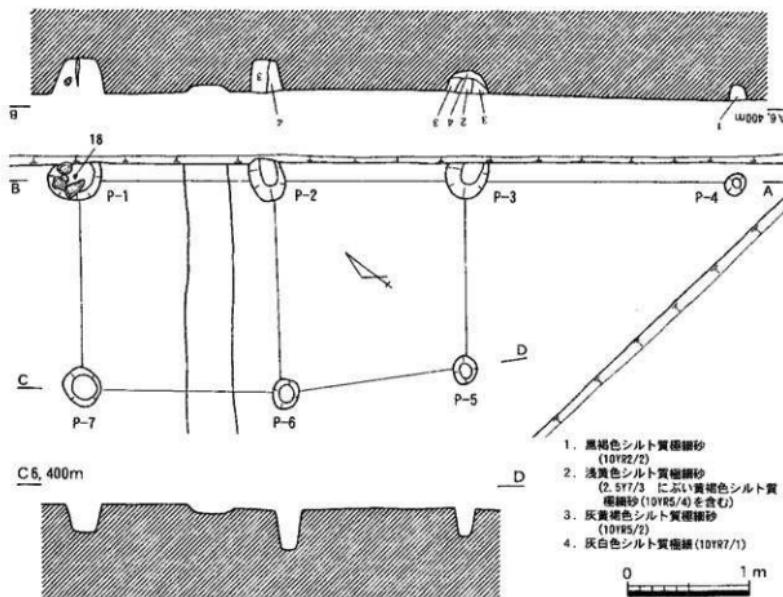
##### S B 1 (第17・18図)

調査区の南東隅において検出された掘立柱建物であり、北側と東側の調査区外に建物は広がる。

確認面のレベルは標高 6.20~6.26m である。検出できたのは、南側列柱の柱穴 3 個とその北側の 4 個の柱穴だけであり、建物全体の平面形や規模は不明であるが、柱穴の位置から總柱建物であると考えられる。南側列柱の方位は N-37°-W を示す。検出された南北長は 2.00m、東西長は 5.74m を測る。柱穴間の芯芯距離は 1.70m である。柱穴の平面形は、P-2・3 の楕円形を除き円形を呈し、その直径は 0.18~0.40m である。深さは 0.09~0.33m を測る。P-1 は中心に柱材の一部が直立し、その周囲には 4 個の詰石が残存する。埋土は 4 壁に分けることができる。

遺物は、柱材 (18) と数点の土師質上器片のみであり、図化することのできる土器片はなかった。

18 は、現存長 27.7 cm を測り、遺存状態は非常に悪い。明瞭な加工痕は見られなかった。



第17図 S B 1 平・断面図 (S : 1/40)



番号	種類	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
18	柱材	(27.7)	(2.9)				

第18図 S B 1出土遺物実測図 (S : 1/4)

## 2 杖穴

### S P 2

調査区の南東隅において検出されたピットである。確認面のレベルは標高 6.23m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.14m、深さは 0.10m を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

### S P 9 ~ 11 • 18 ~ 20 • 25 • 26

調査区の南側中央で検出されたピットで、確認面のレベルは標高 6.20 ~ 6.25m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.15 ~ 0.42m、深さ 0.02 ~ 0.14m を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

### S P 30 • 40 • 41

調査区の南西側で検出されたピットで、確認面のレベルは標高 6.25m である。平面形は円形を呈し、直径は 0.18 ~ 0.35m、深さは 0.15 ~ 0.42m を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

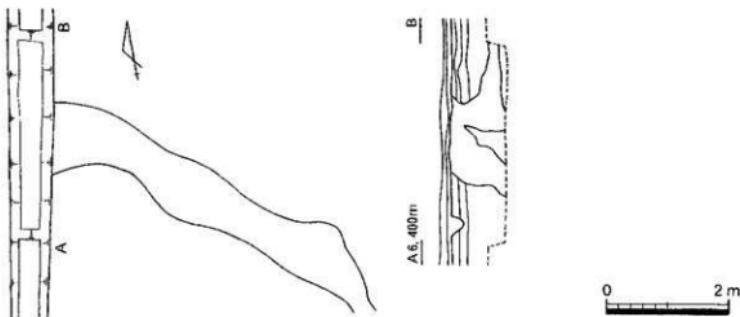
### S P 51 ~ 54

調査区の北西側で検出されたピットで、確認面のレベルは標高 6.00m 前後である。平面形は円形を呈し、直径は 0.12 ~ 0.25m、深さは 0.08 ~ 0.17m を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

## 4) その他

### 1 噴砂 (第 19 図)

調査区の北西側において検出された噴砂である。確認面のレベルは標高 6.00m 前後である。平面形は不整な帯状を呈し、全長は約 6.00m、幅は 0.70 ~ 1.20m を測る。土層断面の観察によれば、確認面より 0.90m 以上深い所から砂が噴き上がっている。噴砂は遺構と切り合っていないので、その時期は不明であるが、噴砂の上面に江戸時代の水田耕作土が堆積していることより、噴砂は江戸時代以前に発生した大地震に伴ったものと考えられる。



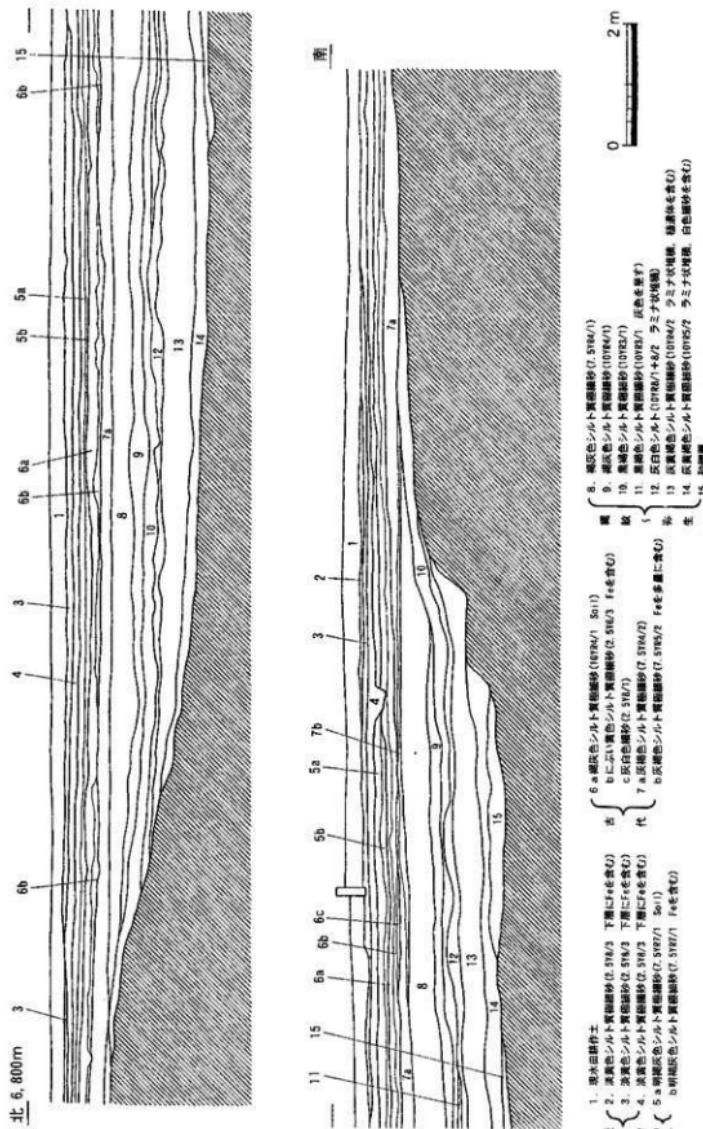
第19図 噴砂平・断面図 (S : 1/80)

## 2 旧河道

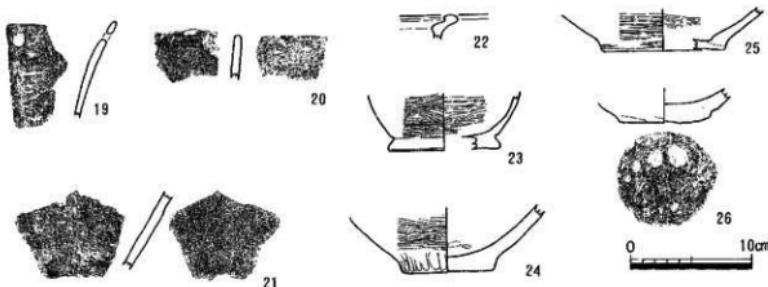
### S R 1 (第 20 ~ 32 図)

調査区中央において検出された旧河道である。

確認面のレベルは北岸で標高 5.92 ~ 6.00m、南岸で標高 6.19 ~ 6.26m である。旧河道は調査区中央を南西 - 北東方向に横断しており、その方位は N - 40° - E を示す。南岸はほぼ直線的に延びてい



第20図 SR1 土層図 (S : 1/80)



番号	器種	寸法(cm)			形態・子法の特徴	色調		断面
		幅	底径	高さ		外	内	
19	繩紋土器 深鉢	(17.3)		(7.3)	外凹縁ミガキ 玄上脱	褐色 10YR6/1	褐灰 10YR5/1	縫~粗砂多色
20	繩紋土器 深鉢	(3.7)		(3.7)	外凸縁ミガキ 内面縦ケズ 口縁端部に押付	灰黄褐 10YR6/2	褐~細砂	
21	繩紋土器 深鉢	(6.2)		(6.2)	外凸縁ミガキ	暗灰褐 2.5Y5/2	褐 2.5Y2/1	縫~細砂
22	繩紋土器 深鉢	32.0		(2.1)	外凸縁ミガキ 内面縦ミガキ+ナメ	濃灰褐 2.5Y5/1	細砂	
23	繩紋土器 深鉢	9.2	(4.6)	(4.6)	外凹縁ミガキ 武前ナメ	黒 10YR2/1	黒褐 10YR3/1	縫~細砂
24	繩紋土器 深鉢	7.5	(5.3)	(5.3)	外凸縁ミガキ+ナメ 内面縦ミガキ 底面未削削	褐褐 7.5YR3/1	灰青褐 10YR3/2	縫~粗砂
25	繩紋土器 深鉢	10.0	(3.4)	(3.4)	内面縦ミガキ 底面未削削	灰黄褐 10YR5/2	褐砂	
26	繩紋土器 深鉢	7.4	(2.9)	(2.9)	内凹縁ミガキ 内面ナメ 底面に円形の凹み	灰青褐 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	縫~粗砂

第21図 S R 1出土遺物実測図(1) (S:1/4)

るが、北岸は北端部で北方向に曲がっており、SR 1は調査区の北側で弯曲すると考えられる。SR 1の幅は約27.00mであり、確認面から河床までの深さは約2.07mを測る。河床南端部の標高は4.20m、北端部では3.85mであり、0.35mの比高差をもって南から北に低くなっている。両岸の斜面は非常に緩やかであるが、中央近くになると急傾斜で落ち込んでいる。河床の幅は2.10~5.00mであり、砂礫層となっており、直径0.30mの流木が2本確認された。埋土は第20図に示しているように、第4~15層に16層に分層される。第4層は近世条里型水田、第5層は中世条里型水田、第6層は古墳時代の水田土壤層、第7層は弥生時代後期~古墳時代の水田土壤層であり、SR 1がほぼ埋没した後の微低地に堆積している。第6~7層は上層断面のみであるが畠畔状の高まりが数カ所検出される。第8~15層は繩紋時代晚期~弥生時代前期の堆積層であり、第12~14層はラミナ状堆積を呈する。

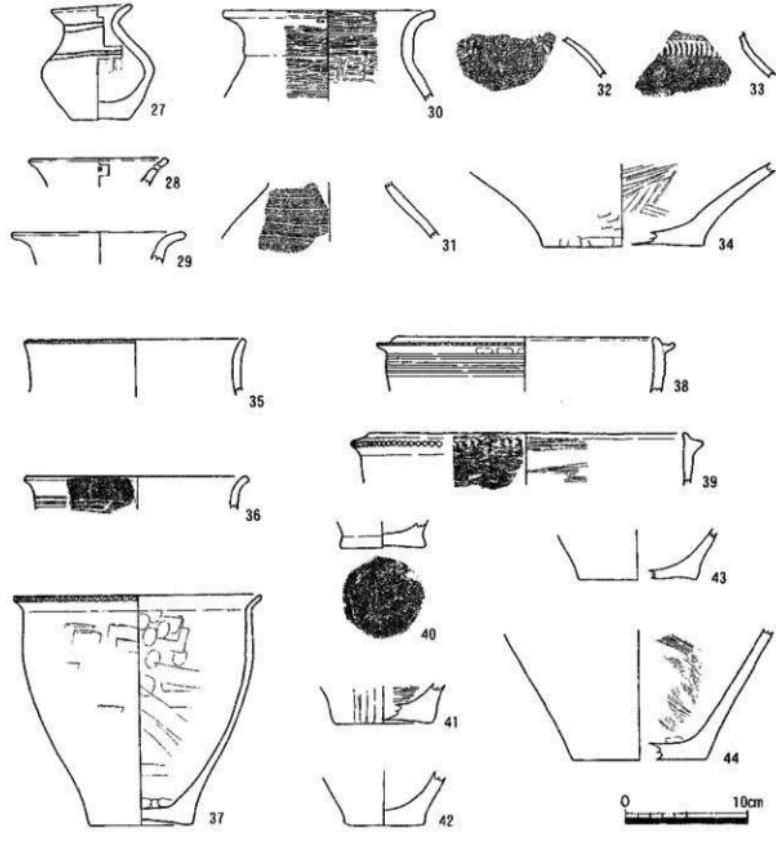
遺物は、繩紋土器深鉢(19~21・24~26・45・46)、同浅鉢(22~23)、弥生土器壺(27~34、47~49・54~55・72~85・121~123)、同甕(35~44・50~52・56~65・86~95・125)、同尚杯(53・66~68・96~102)、同鉢(69・109・124)、同蓋(103~108)、同器台(126)、同製塙土器(70・71・110~114)、土師器壺(115・116・127・132)、同甕(117・118・128~131)、同高杯(120・138~146)、同鉢(119・135~137)、同甕(134)、須恵器杯蓋(147~153)、同杯身(154~157)、同甕(158)、同壺(159・160)、同甕(161)、同甕(162)、打製石庖丁(163~165)、石鏃(166)、石鍬(167)、石製円盤(168)、木製鉗(169)、柄(170)、泥除(171)、加工木(172~175)、加工板(176~178)、その他の繩紋土器・弥生土器・土師器・須恵器片である。

第21図は河床直上より出土した土器、第22図は第8層~河床出土の土器、第23図は第7~8層出土の土器、第24~26図は第7層出土の土器、第27~28図は第6層出土の土器である。

19は直線的に外傾し、口縁端部直下に孔を有する。21~23~25は内外面に箇ミガキを施す。22は口縁端部内面を鋸歯形に肥厚させ、内外面に箇ミガキを施す。

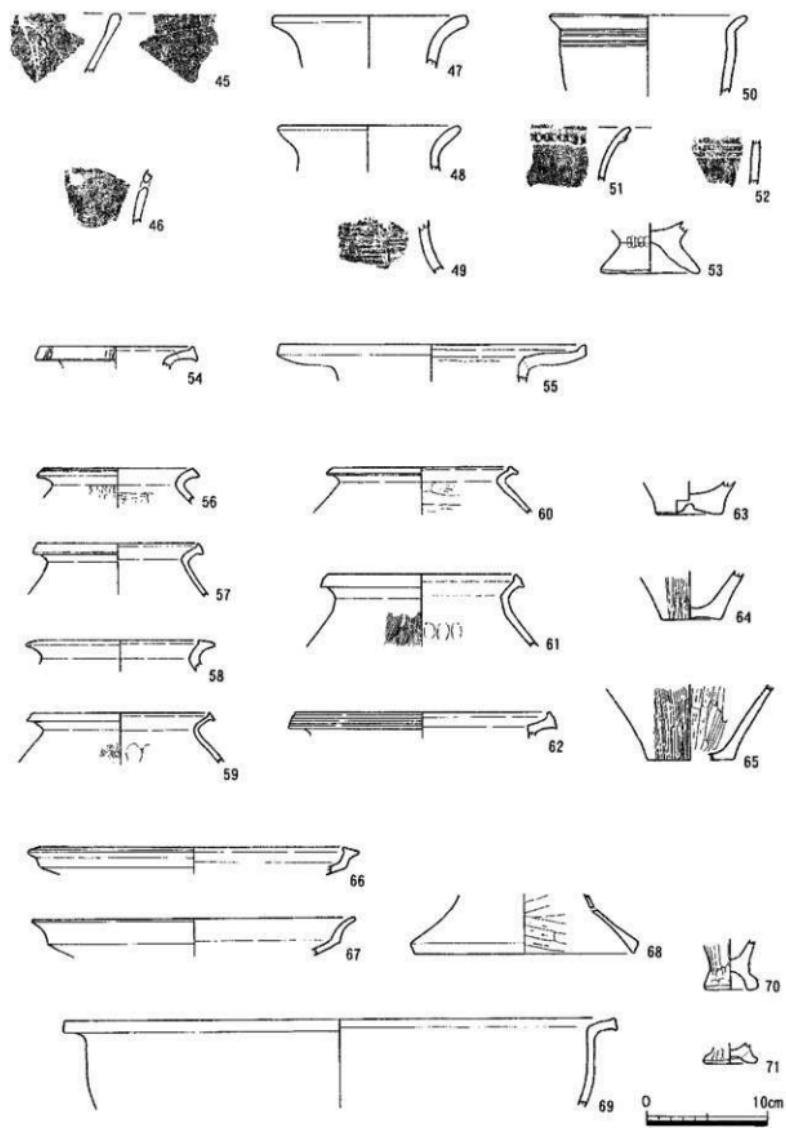
27は完形の小型壺であり、頸部に4分割で描く2条の沈線を巡らし、胸部上位に6分割で描く2条の沈線を巡らす。胸部外面下半に橢円形の黒斑がある。28~30は無紋の広口壺であり、28は口縁端部の下に円孔がある。29~30は口縁部が直立したのち外傾するプロポーションで、頸部にわざかな段を有する。31~32は櫛描直線紋と波状紋を巡らす。

35~37は「如意状」口縁で、35~37の口縁端部には刻目が施される。36には3条の沈線が残存



番号	器種	測量(cm)	断面、手法の特徴	内調		動土
				外	内	
27	赤土上器 壺	5.5	3.6 内面ナメ・外面切削痕有・ナメ・芯棒	灰白	2.5YR5/2	石英・貝石多量
28	赤土上器 壺	16.8	(2.2) 内面凹ナメ・円孔・模様有	灰黒褐	10YR5/2	石英・貝石・角閃石
29	赤土上器 壺	13.8	(2.6) 内面直ナメ	褐1-黄2	10YR7/2	石英・貝石
30	赤土上器 壺	17.6	G.5 外面模三洋文・内面凹・芯棒・低トゲ	褐	7.5YR2/1	灰黒褐 10YR5/2
31	赤土上器 壺	—	(4.7) 内面模三洋文・模様有・内面直ナメ	褐1-高2	10YR7/2	石英・貝石
32	赤土上器 壺	—	(6.2) 内面模三洋文・模様有・内面直ナメ・前・ナメ	褐1-褐	7.5YR5/3	西砂
33	赤土上器 壺	—	内面直ナメ・内面ナメ	灰白	2.5YR7/2	石英・貝石・金发母
34	赤土上器 壺	13.9	(6.8) 内面直ナメ・内面ナメ	灰青	2.5Y6/3	灰砂
35	赤土上器 壺	34.3	17.5 内面直ナメ・内面凹・模様有・ナメ	灰白	10YR2/2	褐2
36	赤土上器 壺	—	(4.7) 内面ナメ・口棒泥痕有・横目	褐	10YR2/1	褐2 10YR2/2
37	赤土上器 壺	18.2	(2.9) 内面直ナメ・外側凹・模様有	褐1-高2	10YR4/3	10YR5/2 石英・板石・角閃石
38	赤土上器 壺	20.2	8.5 外面模ナメ・ナメ・内面模三洋文・ナメ・口棒泥痕有	灰褐	10Y5/1	褐2 褐閃石
39	赤土上器 壺	31.0	(4.8) 内面模三洋文・模様有	灰黒褐	10YR6/2	褐1-金发母
40	赤土上器 壺	26.0	(4.6) 内面直ナメ・ガリ・模様有・外凹・横目	灰青褐	10YR5/2	石英・貝石多量
41	赤土上器 壺	—	内面直ナメ・ガリ	灰白	10YR1/2	石英・貝石多量
42	赤土上器 壺	8.8	(2.2) 内面凹・模様有・万字形の内面ナメ・ナメ	灰黒褐	10YR5/2	石英・重砂
43	赤土上器 壺	7.8	(2.2) 内面凹ナメ・内面直ナメ	灰白	10Y5/1	灰砂
44	赤土上器 壺	6.6	(4.6) 内面凹・模様有	褐1-高2	5YR5/2	石英・模様
45	赤土上器 壺	9.6	(1.5) 赤土模様・内面ナメ・模様有	灰褐	10YR6/1	灰黒褐 10YR10/2
46	赤土上器 壺	10.8	(0.9) 外面模様・内面直ナメ	灰黒褐	10Y5/1	石英・貝石多量

第22図 S.R.1出土遺物実測図(2)(S:1/4)



第23図 SR 1出土遺物実測図 (3) (S : 1/4)

(第23図)

番号	基準(m)	寸法	形状・下法の特徴	内 説		外 上
				外	内	
45	網紋上部 開孔	11.0	底孔 (4.8) 内面ナガ 内面横に突き	底孔 7.5VRS3/1		底孔
46	網紋上部 開孔	11.0	外側金型縫合 開口1個	開口 10YR5/1		外側多頭
47	筋付上部 空	15.6	(1.2) 外側面ナガ	筋付+直棱 10YR7/2	筋付10YR7/2	筋付+外側多頭
48	筋付上部 空	11.6	(3.8) 内面半埋	筋付+直棱 10YR6/3	筋付10YR6/3	筋付+直棱
49	筋付上部 空	18.2	(5.7) 内面凹ナガ 網織在縫合部	底孔 2.5VTR7/2		机め立多頭
50	筋付上部 空	12.0	(6.5) 空山ナガ 横縫合1本 丸形横縫	底孔 7.5VTR7/6	底孔 3VTR6/6	底孔+多頭
51	筋付上部 空	12.0	(4.5) 底面ナガ+側面突起	底孔+直棱 10YR6/2	底孔+直棱 10YR5/2	底孔+直棱
52	筋付上部 空	13.6	(3.6) 内面空穴部 横縫合部	底孔+直棱 10YR6/2		底孔+直棱
53	筋付上部 高脚	8.2	(4.2) 内面ナガ	筋付+底 7.5VRS3/2	筋付+底 7.5VRS3/3	筋付+底+角開口
54	筋付上部 空	12.4	(1.8) 空山ナガ (横縫合外面に3-2条粗筋部) 内面横筋	筋付+底 7.5VRS3/2		筋付+底+角開口
55	筋付上部 空	35.3	(3.0) 内面ナガ 1段筋部(水平) 空山に沿る	底孔 2.5VTR7/2		底孔+角開口
56	筋付上部 空	12.0	(2.0) 空山外筋部(1段) 内面横筋(2段) ロゴ横筋浅い直筋部	筋付+底 10YR7/2		筋付+底
57	筋付上部 空	13.2	(4.0) 空山内筋ナガ (横縫合) 空山に沿る直筋部	筋付+底 10YR5/3		筋付+底+角開口
58	筋付上部 空	12.8	(2.5) 内面横筋(2段) 横筋浅い山筋部	筋 7.5VRA3/2		筋+角開口
59	筋付上部 空	14.6	(4.1) 空山外筋部(1段) 内面筋部(1段)	筋付+底 7.5VRS3/3		筋+角開口
60	筋付上部 空	14.4	(3.8) 内面筋ナガ(1段) 山筋部(2段)	筋付+底 10YR6/2	底孔+直棱 10YR6/2	底孔+直棱
61	筋付上部 空	15.2	(6.1) 空山外筋部(1段) 内面筋部(1段)+ナガ	筋付+底 7.5VRS3/3		筋+横筋
62	筋付上部 空	20.8	(2.1) 空山ナガ 口縫横筋(2段) 直筋部	筋付+底 7.5VRS3/4		筋付+角開口
63	筋付上部 空	5.2	(2.7) 内面筋ケズ部にナガ 成形に木質感の孔有り	筋付+底 7.5VRS3/3	底 2.5VRL7/1	筋付+底+多頭
64	筋付上部 空	4.7	(4.0) 内面筋ケズ部 内面筋ケズ後にナガ	筋付+底 10YR5/3		筋付+底+多頭
65	筋付上部 空	7.0	(0.2) 底面ナガ+内面筋ケズ	筋付+直棱 10YR6/3	筋付+直棱 10YR6/4	筋付+直棱
66	筋付上部 丸孔	24.8	(2.2) 空山ナガ (横縫合) 空山に沿る直筋部	筋付+底 7.5VRS4/4		筋付+角開口
67	筋付上部 丸孔	26.4	(3.1) 内面直筋部	筋付+底 10YR2/3		小突+直孔
68	筋付上部 空	18.0	(1.0) 内面筋ケズ部 内面筋ケズナガ1個直筋部	筋付+底 7.5VRS4/4	筋付+底 7.5VRS4/4	筋付+底+直孔
69	筋付上部 空	45.0	(7.2) 内面横筋	底孔 2.5VRS4/4		筋付+直孔
70	筋付上部 刃型1/2孔	4.2	(4.1) 内面筋ケズ部 内面ナガ	筋付+底 7.5VRS4/1	筋付+直孔 10YR8/4	筋付+直孔+角開口
71	筋付上部 刃型1/2孔	4.2	(1.0) 内面筋ケズ部 内面ナガ	筋付+底 7.5VRS4/4	筋付+底 7.5VRS4/4	筋付+底+直孔

する。38・39は「逆L字形」口縁であり、口縁端部には刻目が施される。38は沈線紋の多条化傾向を見ることができる。

45・46は繩紋土器深鉢で、46は円孔を有する。

47・48は無紋の広口壺であり、49は描描沈線紋を施す。

50・52は「逆L字形」口縁であり、櫛描沈線紋を施す。51は「網紋系」壺であり、口縁端部から少し下がった位置に刻目突帯を持つ。

54は口縁端部を上下に拡張させ、口縁端部外面に3ないし4本単位の押紋が施される。55は直立する頸部から水平方向に広がる口縁部を持ち、口縁端部は上方に拡張する。

56~62は肩部に最大径を持つ胴部から短く屈曲する口縁部を有し、口縁端部は上下もしくは片側に拡張が見られ、凹線を持つものもある。56・59・61の胴部外面は刷毛目、56・60の内面は箆ケズリ、59・61は指頭圧痕が施される。64・65は外面に箆ミガキ、内面に箆ケズリを施す。

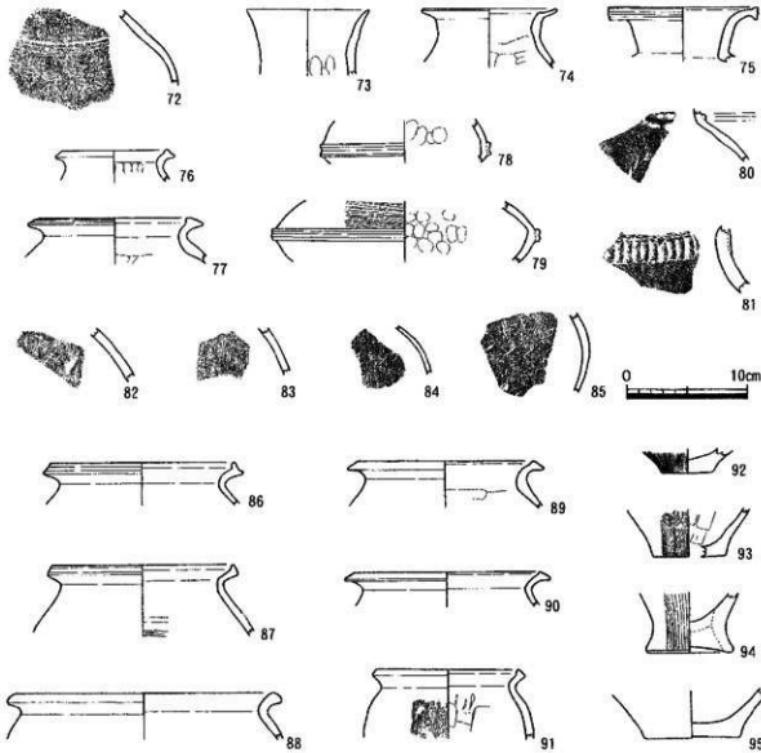
66は杯部が外上方に浅く伸びた後、屈曲して外上方に短く立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は拡張し、浅い凹線を巡らす。67は浅く内湾気味に伸びた体部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部を有する。68の脚部は大きく広がり、裾部は肥厚する。

69は大型の鉢で、体部から外上方に短く伸びる口縁部を有する。

72は3条の箆描沈線を巡らす。73は長頸壺で、口縁部は横ナガが施される。74は短く直立する頸部から受け口状の口縁部を有する。75は外上方に開く頸部と大きく広がる口縁部を有し、口縁端部は上下に拡張し、凹線を巡らす。76・77は胴部から短く屈曲する口縁部を有し、口縁端部は上下に拡張が見られ、凹線を巡らす。78~80は算盤玉形の胴部であり、口縁部との境や最大径部に突帯を巡らせる。81は押紋を巡らす。82は貝殻による押圧、83は櫛波波状紋・直線紋、84は施による押圧、85は刷毛原体による押圧が施される。

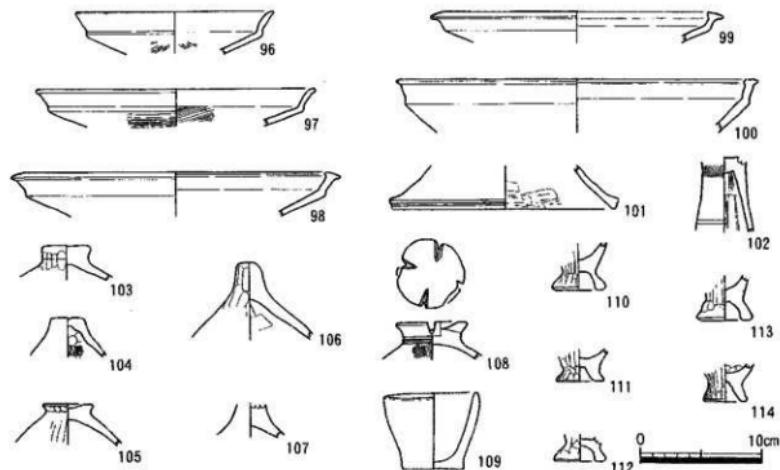
86~91は胴部から短く屈曲する口縁部を有し、口縁端部は上下に拡張が見られる。

96・97は浅く内湾気味に伸びた体部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部を有する。98~100は杯部が外上方に浅く伸びた後、屈曲して外上方に短く立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は拡張し、浅い凹線を巡らす。101は直線的に大きく広がり、裾部はやや拡張する。102は斜行紋と3条と2条の沈線を巡らす。

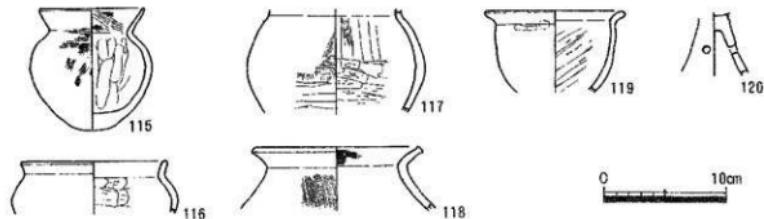


番号	種類	長さ(cm)			形勢・手法の特徴	色調		新土
		右端	左端	跡跡		外	内	
72	骨生上部 破				(6.1) 内面凹字ナ、外側に立脚2条	灰黒褐色 10YR4/2	褐・黄褐色 10YR4/2	石灰・長石・角閃石
73	骨生上部 破	10.2			(5.4) 外面凹字ナ、内面凸字ナ、曲面状	褐・褐 7.5YR6/2	褐・褐 7.5YR6/4	石灰・長石・角閃石
74	骨生上部 破	11.9			(4.7) 内面凹字ナ、内面凸字ナ、頭タケナ、対合立脚	褐・褐 7.5YR6/4	褐・褐 10YR4/2	石灰・角閃石
75	骨生上部 破	12.4			(4.0) 外面凹字ナ、内面テテテテナ、は疊層状に判斷	灰黒褐色 10YR4/2	石灰・鐵・錫鉄	石灰・長石・角閃石
76	骨生上部 破	8.8			(2.6) 内面凹字ナ、内面凹字ナ	褐・褐 7.5YR6/3	石灰・長石・角閃石	石灰・長石・角閃石
77	骨生上部 破	11.6			(3.7) 両側凹字ナ、内面凹字ナ、1段階高に高い凹字跡	褐・褐 7.5YR6/3	石灰・長石・角閃石	石灰・長石・角閃石
78	骨生上部 破	15.0			(4.8) 内面凹字ナ、内面凹字ナ、1段階高に高い凹字跡	灰黒褐色 10YR4/2	褐褐色 10YR4/1	石灰・長石・角閃石
79	骨生上部 破	14.4			(4.4) 内面凹字ナ、内面凹字ナ、表面研磨、相間に現る	褐・褐 7.5YR6/4	褐・褐 10YR4/2	石灰・長石・角閃石
80	骨生上部 破	15.2			(5.5) 内面凹字ナ、内面に三段突起	褐・褐 10YR6/3	灰・灰 2.5Y5/2	石灰・角閃石
81	骨生上部 破	11.6			(5.9) 内面凹字ナ、内面に三段突起	褐・白 10YR7/3	石灰・長石・角閃石	石灰・長石・角閃石
82	骨生上部 破				(6.6) 内面凹字ナ、外側に立脚2条	灰黒褐色 10YR6/3	褐・褐 10YR4/1	石灰・長石
83	骨生上部 破				(6.9) 内面凹字ナ、外側に立脚2条	褐・褐 10YR6/3	褐・褐 10YR4/1	石灰・長石・角閃石
84	骨生上部 破				(4.2) 両側上半ナ、下部網目、網目状に上部立脚	褐・褐 10YR6/3	石灰・長石・角閃石	石灰・長石・角閃石
85	骨生上部 破				(6.6) 内面凹字ナ、内面立脚2条、内面凹字ナ、立脚2条	褐・褐 10YR6/3	褐・褐 10YR4/1	石灰・長石・角閃石
86	骨生上部 破	7.5			(3.3) 口縁部凹字ナ、網目状内面立脚	褐・褐 2.5Y5/2	石灰・長石・角閃石	石灰・長石・角閃石
87	骨生上部 破	15.0			(9.9) 内面凹字ナ、内面立脚2条、内面凹字ナ、立脚2条	灰黒褐色 10YR6/3	褐褐色 10YR4/1	石灰・長石・角閃石
88	骨生上部 破	21.6			(3.6) 内面凹字	褐・褐 7.5YR5/4	灰・灰 10YR5/2	石灰・長石
89	骨生上部 破	14.4			(3.9) 内面凹字ナ、網目状内面立脚、内面凹字ナ	褐・褐 7.5YR4/4	褐・褐 10YR5/2	石灰・長石
90	骨生上部 破	15.2			(2.4) 内面凹字	褐・褐 7.5YR6/3	褐・褐 10YR5/2	角閃石・多量
91	骨生上部 破	11.6			(5.7) 両側凹字ナ、内面立脚2条	褐・褐 10YR5/5	石灰・長石	石灰・長石
92	骨生上部 破	8.2			(2.0) 外面網目2条、凹字ナ	褐褐色 5.3/1	褐褐色 2.5Y4/2	石灰・長石・角閃石
93	骨生上部 破	6.0			(3.6) 各面網目2条、内面立脚2条、立脚2条	褐・褐 10YR4/2	不灰・不灰・角閃石	不灰・不灰・角閃石
94	骨生上部 破	6.8			(4.9) 各面網目2条、内面立脚2条、立脚2条	褐・褐 3YR5/3	褐・褐 7.5YR6/2	石灰・長石
95	骨生上部 破	8.0			内面立脚2条	褐・褐 10YR6/3	石灰・長・粗砂	石灰・長・粗砂

第24図 S R 1出土遺物実測図(4)(S:1/4)

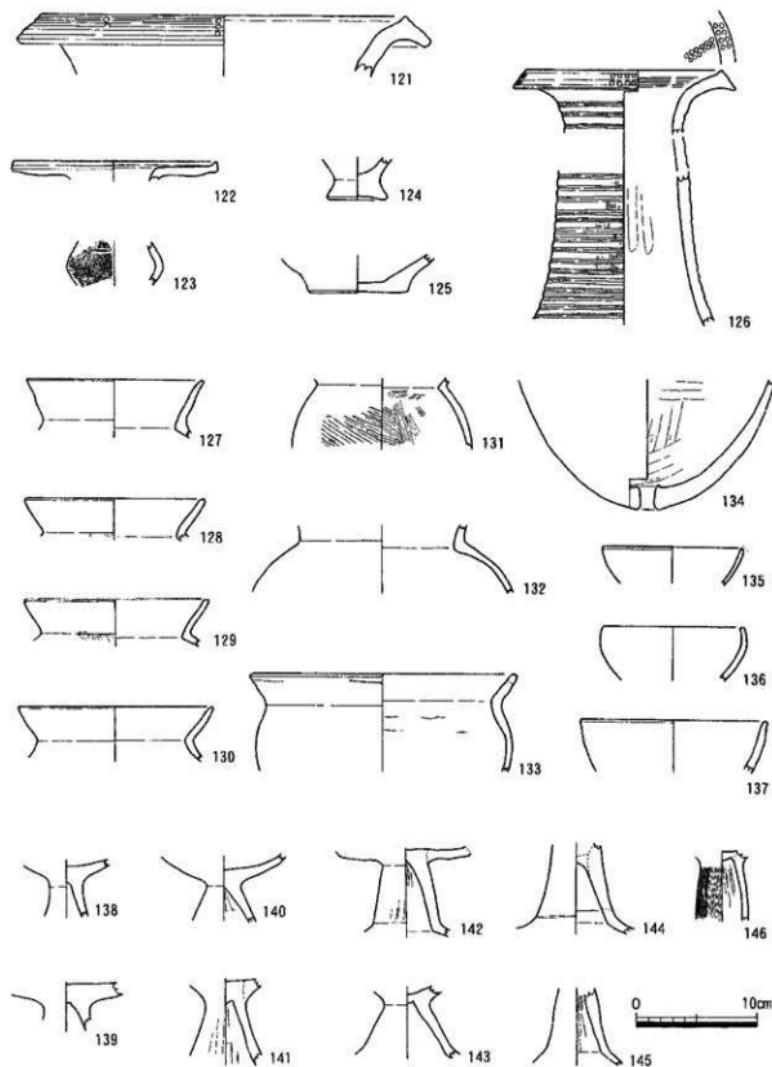


第25図 S R 1出土遺物実測図 (5) (S : 1/4)



第26図 S R 1出土遺物実測図 (6) (S : 1/4)

番号	器種	尺度(cm)			形態・手法の特徴	白 土		鉢 上
		外径	裏径	深さ		外	内	
115	土器	5.6	(2.6)	15.0	口縁外側斜め後下、腹内側下、脚94mm、外底近底部 内底斜め後下	幅1-9cm	7.5VRS/5	石突・足石・角突れ
116	土器	5.0	4.1	外底斜め下	幅1-8cm	10VRS/2	石突・足石	
117	土器	4.2	(2.7)	外底斜め下、内底斜め下	幅1-7cm	10VRS/2	石突・足石	
118	土器	4.9	(2.4)	外底斜め下、内底斜め下	幅1-8cm	10VRS/2	石突・足石	
119	土器	4.3	(2.3)	外底斜め下、内底斜め下	幅1-8cm	10VRS/2	石突・足石	
120	土器	4.6	(3.7)	外底斜め下、内底斜め下	幅1-8cm	10VRS/2	石突・足石	
121	土器	3.9	(3.3)	外底斜め下、内底斜め下	幅1-8cm	9VRS/4	石突・足石	



第27図 SR 1 出土遺物実測図 (7) (S : 1/4)

## (第27図)

番号	器種	径深(cm)		形態・下位の特徴	内 領		断 上
		外径	底径		外	内	
121	名古屋 豊	29.8	(4.9)	口外沿部斜め、口縁部内面横線・竹管状2列粒存	高い 黄褐色	10YR7/4	右葉緑 10YR8/3 右葉・長い多槽
122	名古屋 豊	16.8	(1.6)	口外沿部斜め	黒褐色	2.5Y7/2	右葉・長い角向右
123	名古屋 豊	—	(3.5)	口外沿部・比較	浅黄褐色	10YR8/4	右葉・長い角向左
124	名古屋 豊	5.0	(0.5)	内面直壁	浅黄	2.5Y7/4	右葉・長い
125	名古屋 豊	8.4	(1.1)	内面直壁	褐色	6Y7/4	右葉・長い右
126	名古屋 豊	16.0	(20.0)	外縁部名古屋ナメ・縦縫合部に竹管状2列粒存4対	高い 黄褐色	7.5Y7/3	右葉・長い右
127	土器器 表	14.4	(1.7)	口外沿部斜め、漏斗形底部	高い 黄褐色	10YR7/4	右葉・長い
128	土器器 壁	14.6	(1.0)	口外沿部斜め、内面直壁、隙合部由網生じ	高い 黄褐色	10YR7/2	右葉・長い小量
129	土器器 壁	15.2	(1.8)	口外沿部斜め、誤認外曲輪部毛目	高い 黄褐色	10YR7/1	右葉・長い少量
130	土器器 壁	16.0	(4.5)	内面直壁	褐色	SYR7/1	右葉・長い少量
131	土器器 壁	—	(5.0)	外縁部名古屋ナメ・内面毛目	浅黄褐色	10YR6/4	右葉・長い少量
132	土器器 壁	—	(5.0)	名古屋ナメ・外縁部斜め	褐色	6Y7/4	右葉・長い
133	土器器 壁	21.4	(0.8)	口外沿部内面直壁、隙合部直角・接合痕	褐色	7.5Y8/8	右葉・長い多量
134	土器器 壁	—	(10.0)	外縁部内面直壁4対・底部中央に円孔有り	右葉	6Y7/4	右葉・長い右
135	土器器 壁	11.4	(3.0)	内面直壁	褐色	SYR7/6	右葉・長い少量
136	土器器 壁	11.6	(4.0)	外縁部内面ナメ	褐色	SYR6/4	右葉・長い角向右
137	土器器 壁	13.2	(3.0)	内面直壁	高い 黄褐色	10YR7/3	右葉・長い
138	土器器 直杯	—	(0.7)	内面直壁	褐色	SYR7/6	右葉・長い
139	土器器 直杯	—	(4.0)	内面直壁	浅黄褐色	7.5Y8/3	右葉・長い右
140	土器器 直杯	—	(5.0)	内面直壁・縦縫合部斜め4対	浅黄褐色	7.5Y8/4	右葉・長い多量
141	土器器 直杯	—	(7.1)	口外沿部斜め4対後にナメ・内面横ケリ	淡褐色	2.5Y7/3	右葉・長い
142	土器器 直杯	—	(7.2)	縦縫合部斜め4対後にナメ・内面横4列・ナメ 総合裏	高い 黄褐色	10YR7/4	細・細砂
143	土器器 直杯	—	(5.9)	内面ナメ	淡褐色	10YR8/7	右葉・長い新緑
144	土器器 直杯	—	(7.5)	内面直壁・結合裏	褐色	10YR7/2	細砂
145	土器器 直杯	—	(8.0)	内面直壁・縦縫合ケリ	高い 黄褐色	7.5Y8/6	細砂・薄緑
146	土器器 直杯	—	(5.7)	外縁部毛目 内面直壁4列・ナメ	高い 黄褐色	10YR7/2	右葉・長い少量

103~108は蓋であり、103~105は平坦、106は棒状のつまみである。108はつまみ部に抉りが4ヶ所入り、体部との境に2条の沈線を巡らす。その沈線の付近には赤色顔料が塗られている。

109は完形の小型鉢で、平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る。

115は完形の壺で、球形の胴部から口縁部は「く」の字形に外反する。底部の器厚は非常に厚い。胴部外下面下半に円形の黒斑が見られる。116は胴部から短く屈曲する口縁部を有する。

117・118は「く」の字形口縁である。

121は大型の壺で、口縁端部は下方に大きく拡張し、外面に凹線紋を巡らせ、竹管による押圧が見られる。123は小型の壺で、縦と横方向の沈線がある。

126は上下に「ハ」の字形に広がる形態の器台であり、口縁端部は上下に拡張して凹線紋を巡らす。竹管による円形押圧紋が口縁部内面に12個1対、口縁端部に8個1対が施され、土器全体としては4対の円形押圧紋が施されると推定できる。体部外表面は凹線紋を多条に巡らす。

127~133の口縁部は「く」の字形に外反する。

134は底部中央に直径1.5cmの円孔を有する。

135~137は半球形の体部で、136の口縁部はやや内湾する。

138~145は杯部下半がほぼ水平方向に伸び、脚部下位が外方に大きく屈曲する形態の高杯であり、摩滅により調整は不明である。142の杯部は接合痕で割れており、141は接合痕が明瞭である。

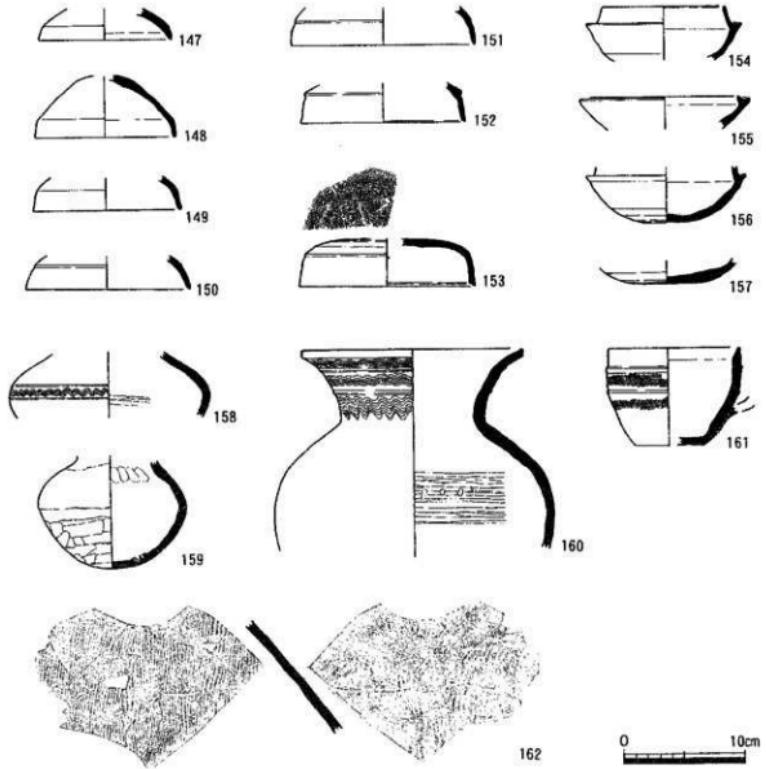
147は器高の低い杯蓋で、天井部からほとんど稜を持たずに口縁部に至る。148は器高が高く、天井部と口縁部の境にわずかな稜を有し、口縁部は直立気味である。149はわずかな稜を有す。150・151は天井部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直立気味である。口縁端部はやや尖る。152・153は天井部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直立する。口縁端部は内面に段を持つ。153は天井部外面に算記号がある。

154・156は水平の受け部から内傾する長い口縁部が付く。155は斜めに延びる受部から内傾する短い口縁部が付いている。

158は最大径部に2条の沈線と波状紋を巡らす。

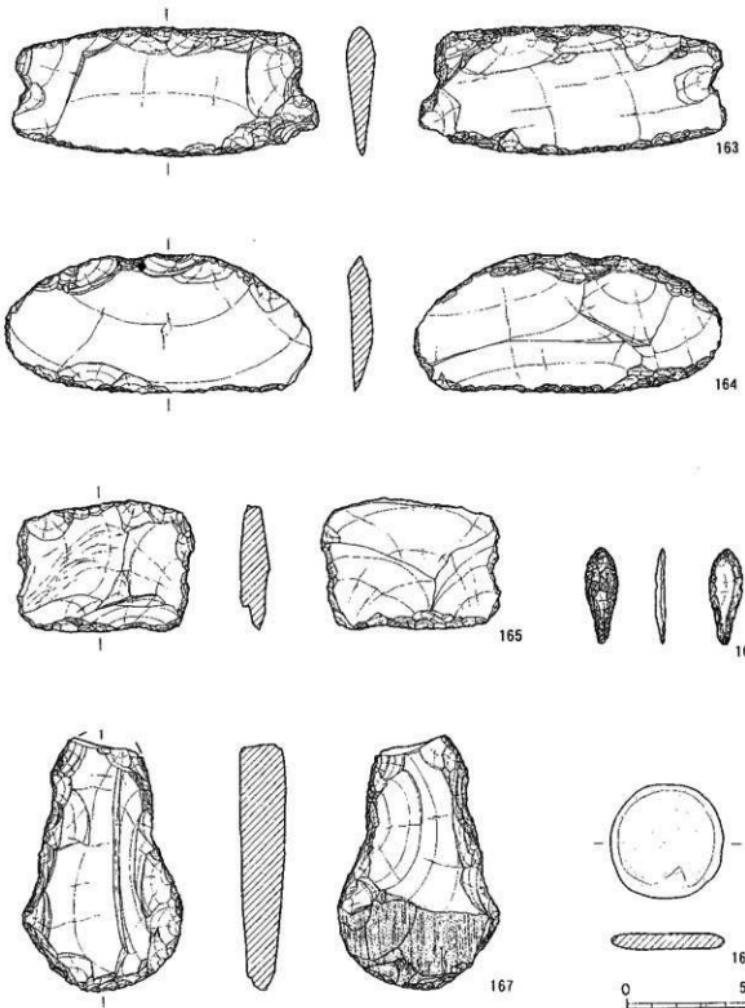
159は小型の壺で、胴部外面上半と内面下位に自然釉がかかっている。160は胴部から屈曲し大きく外反する口縁部であり、口縁部外面に3段の波状紋を巡らす。

161は把手を欠損する鉢であり、口縁部と体部の境に稜を有し、体部外面上に波状紋を2段巡らす。



番号	器種	法度(cm)		形態・手法の特徴	色調		期	
		上径	底径		身	肩		
147	縦貫縫 手縫	10.8	(3.2)	ナデ	灰白	2.5W/2	SC1-10W/2	精良
148	酒山縫 手縫	11.5	(3.0)	内輪ナメ 天井部外縫面ナメ	灰白	N7	相5W/2/6	精良
149	縦貫縫 手縫	12.2	(2.7)	内輪ナメ	灰白	N8		精良
150	酒山縫 手縫	13.6	(2.7)	内輪ナメ 木筋に接合	灰白	2.5W/2	SC1-N7/1	精良
151	酒山縫 手縫	15.0	(3.1)	内輪ナメ 各面に接合	灰白	N7		精良
152	酒山縫 手縫	13.6	(2.2)	内輪ナメ 各面に接合	灰白	N8		精良
153	縦貫縫 手縫	14.3	(3.0)	内輪ナメ 天井部外縫面ケズ・泡込み	灰白	N8	灰白 N7	精良
154	酒山縫 手縫	10.0	(4.4)	内輪ナメ 且普通内縫面ナメ 体部細面下部ケズ	灰白	4W/1	SC1-N7/	精良
155	縦貫縫 手縫	12.0	(2.6)	内輪ナメ	灰白	N7	相5W/	精良
156	酒山縫 手縫	14.5	(3.5)	内輪ナメ 体部細面下部ケズ	灰白	N8		精良
157	縦貫縫 手縫	13.0	(2.8)	内輪ナメ 体部細面下部ケズ	灰白	N7		精良
158	酒山縫 手縫	15.5	(3.3)	内輪ナメ 内輪外縫面ナメケズ・泡込み 嵌状紋	灰白	N8		精良
159	酒山縫 手縫	10.0	(3.0)	内輪ナメ 槌打テクニク 外縫面下部ケズに白無地	灰白	N8		精良
160	酒山縫 手縫	18.2	(2.6)	内輪ナメ 製造外縫ナメ 内輪ナメ 壁部波状紋	灰白	N8		精良
161	酒山縫 手縫	11.6	5.6	7.9	内輪ナメ 瓶詰外縫下部ケズ 波状紋	灰白	SC1-N7/1	精良
162	乳山縫 手縫			(3.0) 外縫下部ケズ 日 内縫外縫波状テクニク	灰白	N7		精良

第28図 S R 1出土遺物実測図(8)(S:1/4)



番号	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
163	打製石砲丁	12.5	5.2	1.2	54.5	サヌカイト	両端は大剣面を両面から調整する
164	打製石砲丁	12.5	5.6	0.8	86.8	サヌカイト	刃部は直線、背部は溝曲。刃部は両面から調整する
165	打製石砲丁	7.3	5.3	1.2	52.8	サヌカイト	刃端に僅かな抉りを持つ
166	石鏃	3.9	1.3	0.4	2.3	サヌカイト	凸基有茎式。縁刃部は両面から細かい調整を行う
167	打製石鏃	(10.3)	6.6	1.8	127.9	サヌカイト	刃部の片面のみ摩耗し使用痕が明瞭に見える
168	石製円盤	4.5		0.6	30.1	蛇紋岩	

第29図 S R 1 出土遺物実測図 (9) (S : 1/2)

163～166・168は第7層、167は第8層～河床より出土した石器である。

163は両端に抉りのある打製石庖丁であり、刃部は大剥離面を利用し、縁辺部を両面からの調整によって刃を付ける。背部は両面からの調整により背潰しを行う。164は直線的な刃部で背部が湾曲する形態であり、刃部は大剥離面を利用し、縁辺部を両面からの調整によって刃を付ける。背部は両面からの調整で背潰しを行う。165は小型の打製石庖丁で、両端に抉りがある。

166は縁辺部に両面からの細かい調整を行い、表面には細かい調整を行うが裏面には平坦な剥離面がある。

167の形状は刃部が広く、基部が狭いバチ形を呈する。刃部の片面には使用による磨滅と擦痕が見られる。

174は第7層、169～173・175～178は河床直上に出土した木器である。

169は軸部を欠損する鍔身である。軸部と刃部との境が明瞭で、刃部の両側がほぼ平行する。余良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿原始編』(1993.3)の「曲柄平鋸C II式」である。刃部の断面形は平坦な板状で、前面・後面の区別が不明瞭である。全面に細かい加工が施される。

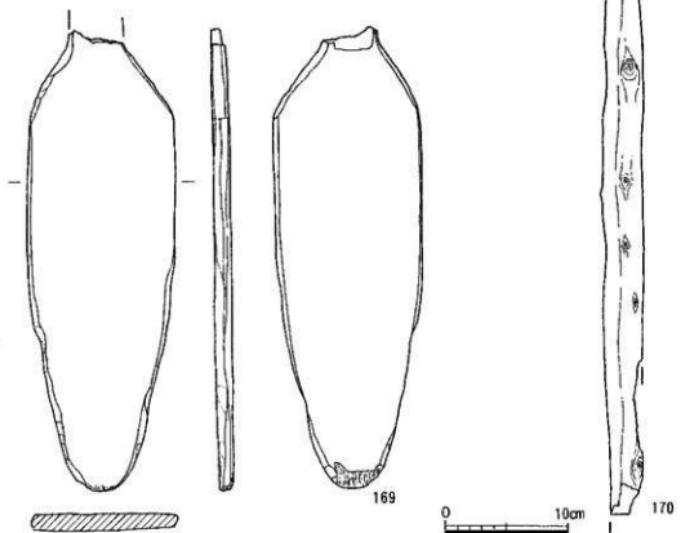
170は169の近くから出土し、柄の可能性がある。上端は全方向からの加工が行われ、単なる棒状の柄『木器集成図録』の「I a型」である。

171は泥除の未製品で、平面形は隅丸正方形を呈し、断面形は周囲から中央に向かって膨らむ笠形になる。『木器集成図録』の「泥除II式」である。

172・173は先端部を焼いており、174は全面を焼いている。

175は端部に加工が行われている。加工はやや不明瞭である。

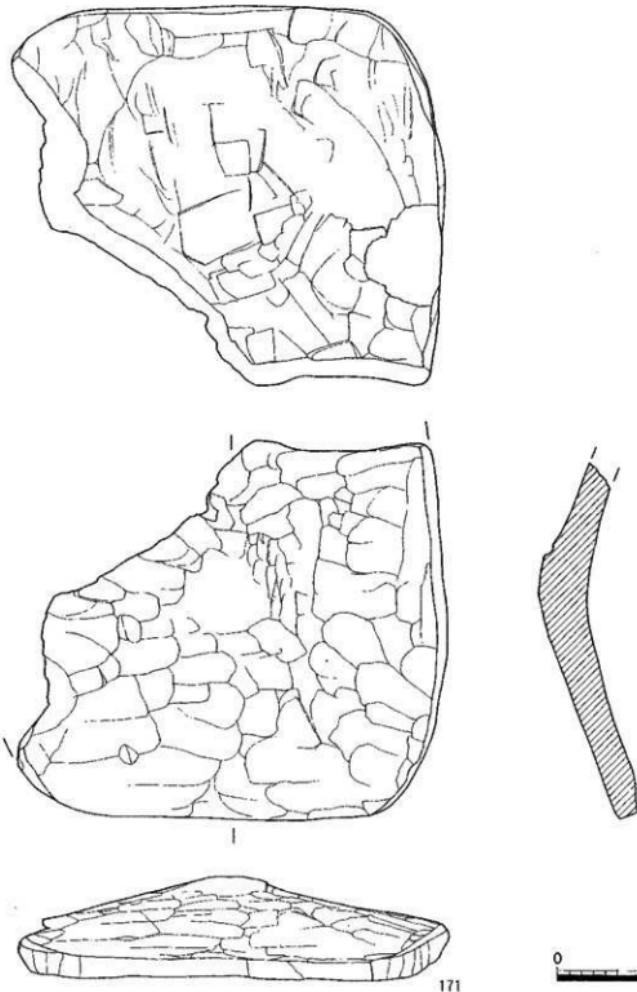
176～178は柾目の板材であり、幅10cm前後を測りほぼ同一規模のものである。全面に加工が行われている。



第30図 S R 1 出土遺物実測図 (10) (S : 1/4)

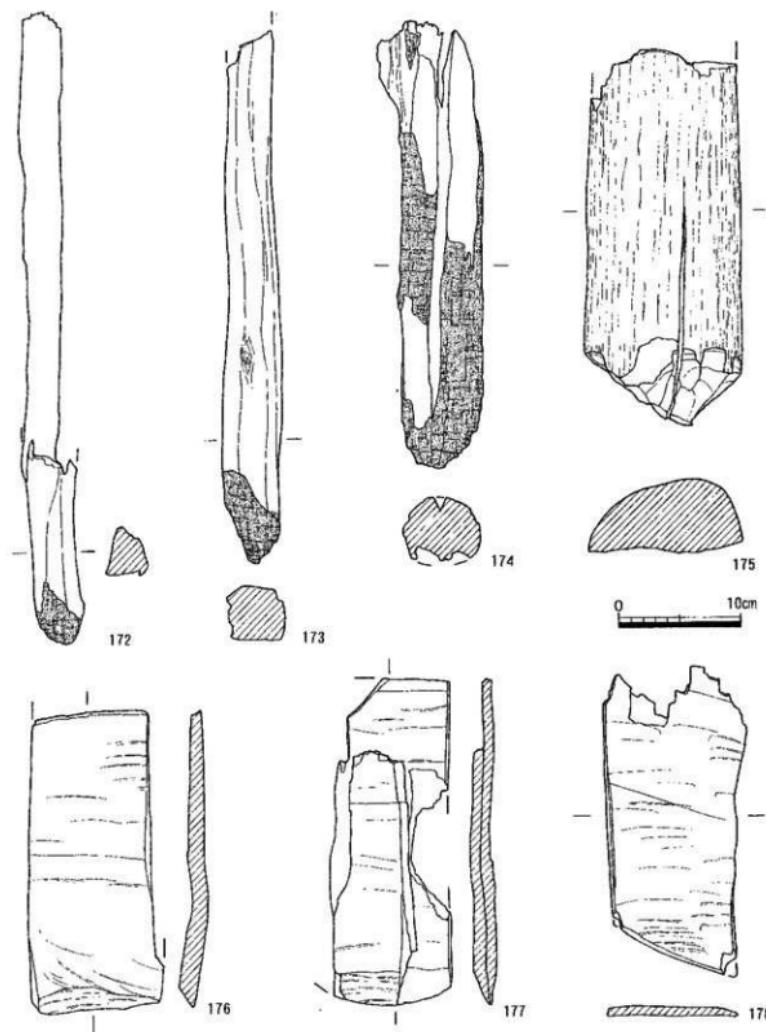
(第30図)

番号	形種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
169	平版	(37.6)	12.1	1.4			柄を欠損。全面に縦かい加工。経年
170	加工木	(90.0)	2.9				端部を全方向から加工。柄の可能性



番号	形種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
171	洗除	(35.5)	(30.8)	2.5~4.1			全面に縦かい加工を施す。板状

第31図 SR 1出土遺物実測図(11)(S:1/4)



番号	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚さ(cm)	重さ(g)	材質	特徴
172	加工木	(51.4)	3.5	3.9			ミカン削り。端部は焼かれる。
173	加工木	(43.3)	(4.6)	4.3			端面は焼かれる
174	加工木	(36.3)	6.5				丸木。全面が焼かれる。
175	加工木	(30.8)	12.5	6.0			丸木を平裁。端部を加工する。
176	加工板	(24.6)	11.0	1.6			板目。端部を斜めに切断。加工痕が若干残る。
177	加工板	26.5	(9.8)	1.0			板目。端部を斜めに切断。加工痕が若干残る。
178	加工板	(25.2)	10.6	0.8			板目。両面を加工する。

第32図 SR 1出土遺物実測図(12)(S:1/4)

## 第4章 自然科学的分析

### 第1節 東中筋遺跡の花粉化石

鈴木 茂(バレオ・ラボ)

ほぼ遺跡全体が旧河道にあたる東中筋遺跡においては平成11年度および12年度に発掘調査が行われ、平成11年度調査では流路の埋土から縄文時代後期～古墳時代末までの遺物が出土している。また平成12年度調査では弥生時代後期と考えられている珪壁が検出されている。以下には旧河道より採取された土壤試料について花粉分析を行い、弥生時代を中心とした東中筋遺跡周辺の植生変遷について検討した。

#### 1. 試料と分析方法

分析試料は旧河道断面中央部の埋積土層6層～14層より採取された10試料である。各試料について、試料1(6a層)は黒灰褐色の砂質シルト、試料2(7a層)はやや粘土質の黒褐色砂質シルトである。試料3、4(8層)は黒褐色の粘土で、試料3はややシルト質である。試料5(9層)は黒色の粘土、試料6(10層)は黒～黒褐色の粘土で、黄灰色のシルト小塊(結核?)が点在している。試料7(12層)は黒～黒褐色のシルト質粘土で、本層においても黄灰色のシルト小塊が少し認められる。試料8(13層上部)はやや泥炭質の黒～黒褐色粘土、試料9(13層下部)はやや泥炭質の黒色砂質粘土。試料10(14層)は黒色の砂質泥炭質粘土である。各試料の時代について、試料1、2(6a層、7a層)が7世紀、試料3～6(8層～10層)が弥生時代後期、試料8、9(13層)が弥生時代前期～中期、試料10(14層)は縄文時代後期～弥生時代前期と考えられている。また、8層～15層が旧河道の埋土である。なお旧河道の断面については別章を参照して頂きたい。花粉分析はこれら10試料について以下の手順にしたがって行った。

試料(湿重約3～4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離(臭化亜鉛溶液：比重2.1を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトトリス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また、花粉化石の単体標本を適宜作成し、各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

#### 2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉48、草本花粉32、形態分類を含むシダ植物胞子5の計85である。これら花粉・胞子の一覧を表1に、また主要な花粉・胞子の分布を図1に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものとし、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括してある。また分布図に地質柱状図を示したが、試料1、2は他試料(旧河道中央部)とは別地点(岸寄り)より採取されたものであり、この柱状図は模式的に記したものである。

検鏡の結果、樹木花粉に特徴的な産出傾向が認められたことから3つの花粉化石群集帯(下位よりI～III)を設定した。

花粉帯I(試料9、10)はコナラ属アカガシ亜属の優占で特徴づけられる。次いで多く認められたの

図表 1 岩出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
樹木											
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	1	4	4	2	3	2	2	1
モミ属	<i>Abies</i>	1	1	2	6	3	2	2	2	2	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	2	6	16	7	2	3	7	5	1
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属被管植物属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	7	2	18	11	9	7	2	6	2	2
マツ属(小網)	<i>Pinus (Unknown)</i>	2	1	6	6	3	2	2	5	3	2
ガルダヤシ属	<i>Schizopitys</i>	5	2	9	15	14	10	1	8	7	7
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	36	22	25	32	28	69	19	26	15	8
イチイ科→イヌガヤ科→ヒノキ科	<i>T. C.</i>	25	27	21	97	54	54	59	94	23	28
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	5	6	1	-	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrsinaceae</i>	-	1	5	-	-	-	-	-	-	1
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	3	1	1	-	1	1	-	1	-
マムシデコロニアサグ属	<i>Carpinus - Ostrea</i>	8	10	14	8	5	3	5	3	2	1
ガシノキ属	<i>Betula</i>	1	-	3	2	2	2	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Ailanthus</i>	2	1	3	9	1	1	-	-	-	-
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	3	1	-	1	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ属	<i>Quercus rubra</i> L.	44	52	67	22	24	29	14	6	24	13
コナラ属カシカシバ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	52	119	124	36	48	34	72	33	103	96
クリ属	<i>Castanea</i>	4	1	1	-	1	2	3	2	6	9
シノブ属→マツバシイ属	<i>Castanopsis - Fasania</i>	21	30	25	11	8	7	8	6	9	18
ニホンカツラ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	2	-	6	3	3	2	1	-	3	3
エキナセラ属	<i>Celtis - Apiantha</i>	-	1	1	-	2	1	7	-	3	8
ヤドリギ属	<i>Vitis</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カクカラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シキミ属	<i>Ilicium</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イヌモチ属	<i>Ditsylium</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アブクマ属	<i>Liquidambar</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	34
モクレン近似種	<i>cf. Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
モクダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
セイダン属	<i>Melia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウラシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
モサキ属	<i>Ilex</i>	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1
ニシキギ属	<i>Ostrya</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ガシ属	<i>Quercus</i>	-	1	1	1	1	1	1	1	1	-
トネリコ属	<i>Acacia</i>	1	1	1	1	1	1	1	1	1	-
ブナ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
ツバク属	<i>Parthenocissus</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-
サカキ属→ヒサカキ属近似種	<i>cf. Clearya - Eurya</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ダケ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ウツギ属	<i>Araliacese</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ハスカ属	<i>Syringa</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ハボクノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1
トヨリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ニワコロ属近似種	<i>cf. Sambucus</i>	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本											
ヒメアシロ属	<i>Typha</i>	1	1	-	2	2	9	23	31	16	12
サジモモガ科属	<i>Polygonaceae</i>	-	-	-	2	-	-	-	-	1	1
オモガ科属	<i>Alisma</i>	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-
スグリ属→ミズオオバコ属	<i>Sagittaria</i>	14	8	35	20	4	1	1	-	-	-
イネ科	<i>Blyxa - Ottelia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤノリグサ科	<i>Gramineae</i>	118	193	531	298	151	116	86	96	85	39
ミズオオイ属	<i>Cyperaceae</i>	30	21	18	68	96	129	165	97	18	17
ニリ科	<i>Muscochoria</i>	1	-	8	6	10	-	-	1	-	-
ギンナン属	<i>Liliaceae</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ギンジソウ属	<i>Ranunculus</i>	1	2	5	8	5	4	37	94	24	5
サカゲダケ属→ウカギツミ属	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocalon</i>	6	4	1	3	3	2	1	2	-	-
イタリヤリ属	<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	-	-	-	1	-	-	1	1	7	7
アカツキ科→ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	1	-	3	3	1	1	1	-	-	-
ナシノリ科	<i>Caryophyllaceae</i>	1	-	1	3	3	3	3	-	-	-
カラマツ属	<i>Thlaspi</i>	1	-	2	-	1	4	3	2	2	1
乾の木シダ科	<i>other Psilotaceae</i>	2	-	-	1	0	12	16	2	2	-
アブラナ科	<i>Cruciferaceae</i>	2	1	1	-	-	-	1	1	-	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	4	-	-	4	1	3	6	2	16	19
キカラシガ属	<i>Rotala</i>	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-
フサモチ属	<i>Myrtylliflorum</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	3	8	5	4	-	-	-	-	5	7
ヒルガ科属	<i>Clypeola</i>	1	-	-	-	-	-	2	1	1	-
シソ科	<i>Labiatae</i>	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカツキ属→ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヘクリカズラ属	<i>Paeonia</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ゴキヅル属→アマチャヅル属	<i>Actionaria - Gynostemma</i>	-	-	-	-	-	-	-	6	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	22	23	26	8	6	8	4	11	131	61
他のアキノキ利科	<i>other Acalypheae</i>	-	-	-	-	-	-	2	2	5	1
タンボオキ利科	<i>Liquiiflorae</i>	1	5	1	8	-	3	1	1	1	1
不明花粉	Unknown pollen	62	29	6	51	57	72	39	39	28	18

T. - C. は Taxaceae-Cephaeliotaceae-Cupressaceaeを示す

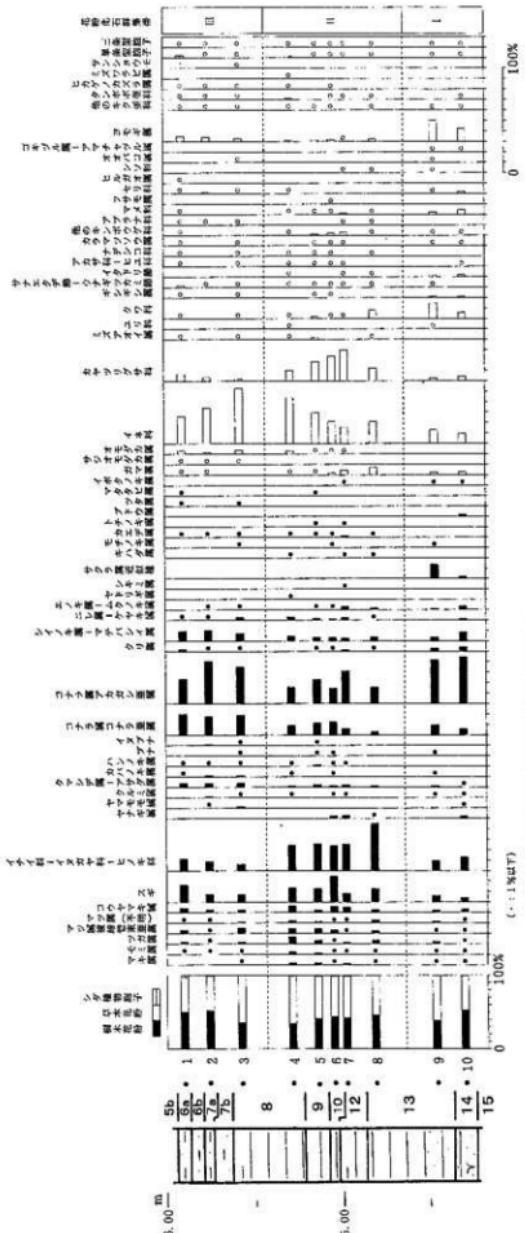


図1 東中筋遺跡の花粉化石分布図  
(樹木花粉は樹木花粉總数、草本花粉・穂子は花粉・穂子總数を基數として百分率で算出した)

はイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）やコナラ属コナラ亜属で出現率は10%前後を示し、スギやシイノキ属…マテバシイ属（以後シイ類と略す）が5%前後得られている。またサクラ属近似種が試料9において約14%を示すなど本帶において特徴的に産出している。草本類では試料9において約20%を示しているヨモギ属が最も多く、次いで多いイネ科やクワ科は10%前後検出されている。その他、ガマ属、カヤツリグサ科、ギンギシ属、イタドリ節、マメ科が2試料とも1%を越えて得られている。

花粉帯II（試料4～8）はアカガシ亜属の半減とヒノキ類の増加で特徴づけられる。スギも試料6において出現率が約25%に達するなどやや増加しており、ツガ属やマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）も同様である。その他ではコナラ亜属が10%前後の出現率を示し、コウヤマキ属、クマシデ属—アサダ属、シイ類が全試料1%を越えて得られている。草本類ではイネ科の減少傾向からの急増と、それとは対称的なカヤツリグサ科の増加・減少が特徴的である。またI帶で最も多く得されていたヨモギ属の激減も特徴的であり、クワ科も減少している。その他では水生植物（抽水植物）のガマ属が本帶最下部において約7%を示すなどやや多く得られていたが上位に向かい減少している。反対にオモダカ属（抽水植物）は本帶最下部試料を除き得られ、上位に向かい多く観察されており、ミズアオイ属（抽水植物）も試料5において1%を越えるなど若干検出されている。

花粉帯III（試料1～3）はアカガシ亜属の再びの優占で特徴づけられるが最上部試料1では出現率を下げている。コナラ亜属が20%弱に増加してアカガシ亜属に次いで高い出現率を示しており、シイ類やクマシデ属—アサダ属も出現率を上げている。一方ヒノキ類は急減するものの上位に向かい緩やかな増加傾向が認められ、スギも同様である。草本類ではイネ科がさらに出現率を上げ、その後上位に向かう出現率を下げている。反対に低率ではあるがカヤツリグサ科が増加傾向を示しており、ヨモギ属も同様である。水生植物ではオモダカ属が全試料1%を越え、サジオモダカ属（抽水植物）も全試料で認められている。その他、ガマ属、ミズアオイ属、セリ科、オオバコ属などが若干得られている。

### 3. 東中筋遺跡の植生変遷

これまで花粉分析の結果を示してきたが、ほぼ同試料を用いてプラント・オパール分析も行われており、この結果も合わせ弥生時代を中心とした東中筋遺跡周辺の植生変遷について示す。

弥生時代前期：花粉帯Iに当たり、遺跡周辺丘陵部では稲線を中心にアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が広く成立していた。またこの丘陵部では斜面を中心にヒノキ類やスギの林がみられ、コナラ亜属を主体にクリ属やサクラ属近似種などを交えた落葉広葉樹林も一部に成立していた。このコナラ亜属は河川周辺の微高地にも生育していたと推測され、他にエノキ属—ムクノキ属などもみられたであろう。さらにこれら森林の林縁部にはケネザサなどのネザサ節型のササ類やススキ、チガヤなどのウシクサ族が生育しており、ケネザサーススキ群落といったような草地を形成していたであろう。一方河川部では、水際にガマ属やヨシ属が、また岸辺にはヤナギ属や樹木と予想されるクワ科（ヤマグワ？）などが生育しており、ヨモギ属を中心にギンギシ属やイタドリ節、ゴキヅル属—アマチャヅル属などの草本類が上手などに広く分布していた。

弥生時代中期から後期：花粉帯IIに当たり、丘陵部に広く成立していた照葉樹林はやや縮小し、代わってスギやヒノキ類の林が分布を拡大した。これについて、大阪の河内平野では弥生時代のⅢ期末またはIV期初頭に黎明期を迎えた洪水時代はV期には発展期とも言うべき段階に至った（那須 1989）と考えられている。時代はほぼ弥生時代の中期から後期に当たり、河内平野でみられた気象現象は当然ながら高松市周辺にも起ったと考えられる。この洪水あるいは多雨といった現象で遺跡周辺の丘陵部では土地が不安定となり、照葉樹林はその影響を受けて縮小したものと推測される。一方スギや

ヒノキ類はこうした所にも生育が可能であり、照葉樹林が成立できなくなった跡地に侵入し、林分を広げたのであろう。またニヨウマツ類も同様のことと多少増加したとみられ、その他モミ属やツガ属、コウヤマキ属などの針葉樹類がこの時期や日立つようになった。

この頃の河川部では次第に湿地的環境が広がり、ここに初めガマ属やカヤツリグサ科が分布を拡大し、続いてヨシやツルヨシなどのヨシ属が急速に増加し、ヨシ原といった景観を見せるようになった。また一部にはオモダカ属やミズアオイ属などの抽水植物も生育しており、沈水植物のフサモ属がみられるような水域の存在も予想される。

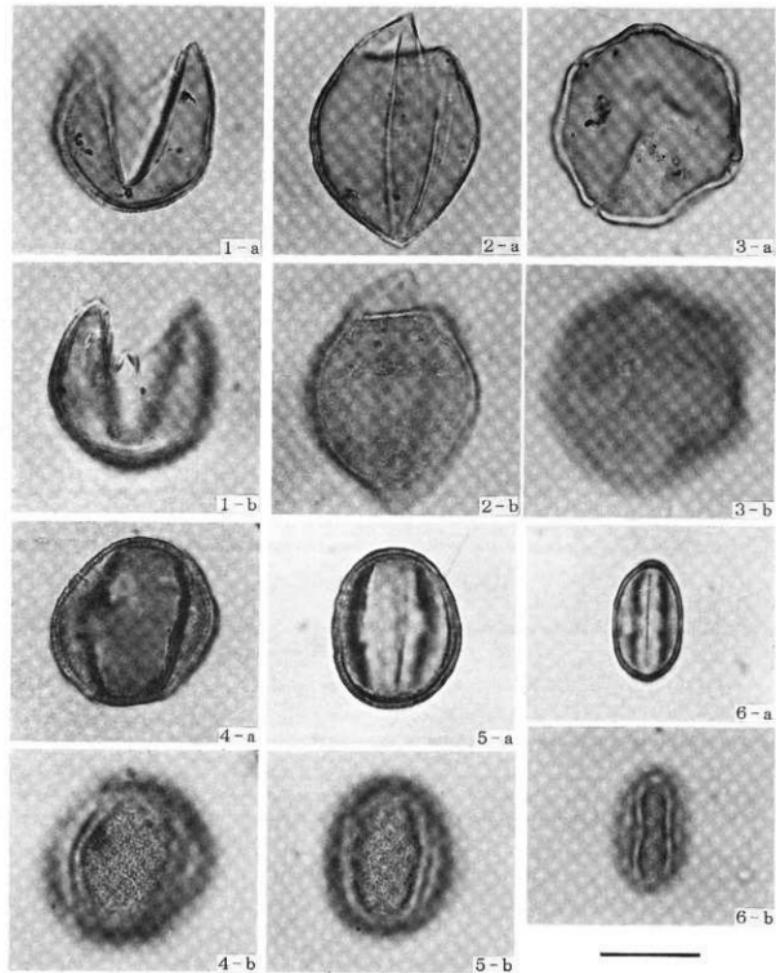
本帶最上部試料においてイネのプラント・オバールが突然と多く検出されるようになり、弥生時代後期と考えられている畠畔遺構も検出されていることなどからこの時期における水田稻作の開始が予想される。河川部では先に記したようにヨシ原が成立していたと考えられ、水田稻作はこのヨシ原を切り開き行われるようになったのであろう。よってヨシ原は急速に縮小し、ヨシ属は水田内や周辺水路などにわずかにみられるのみとなり、カヤツリグサ科も同様である。また抽水植物のオモダカ属、ミズアオイ属や水生シダ植物のミズワラビ属が水田雜草として水田内に生育していたであろう。

弥生時代後期～7世紀：花粉帯Ⅲに当たり、周辺丘陵部では再び照葉樹林がその林分を広げた。これは洪水時代後における土地の安定に起因するものと推測される。一方スギ林やヒノキ類の林は縮小したが緩やかではあるが回復の傾向がみられ、コナラ亜属とともに二次林要素として増加したものと推測される。

この頃の低地部（河川部）では依然として水田稻作が営まれており、水田雜草としてオモダカ属やミズアオイ属に加え、同じ抽水植物のサジオモダカ属や水生シダ植物のサンショウモも生育していた。

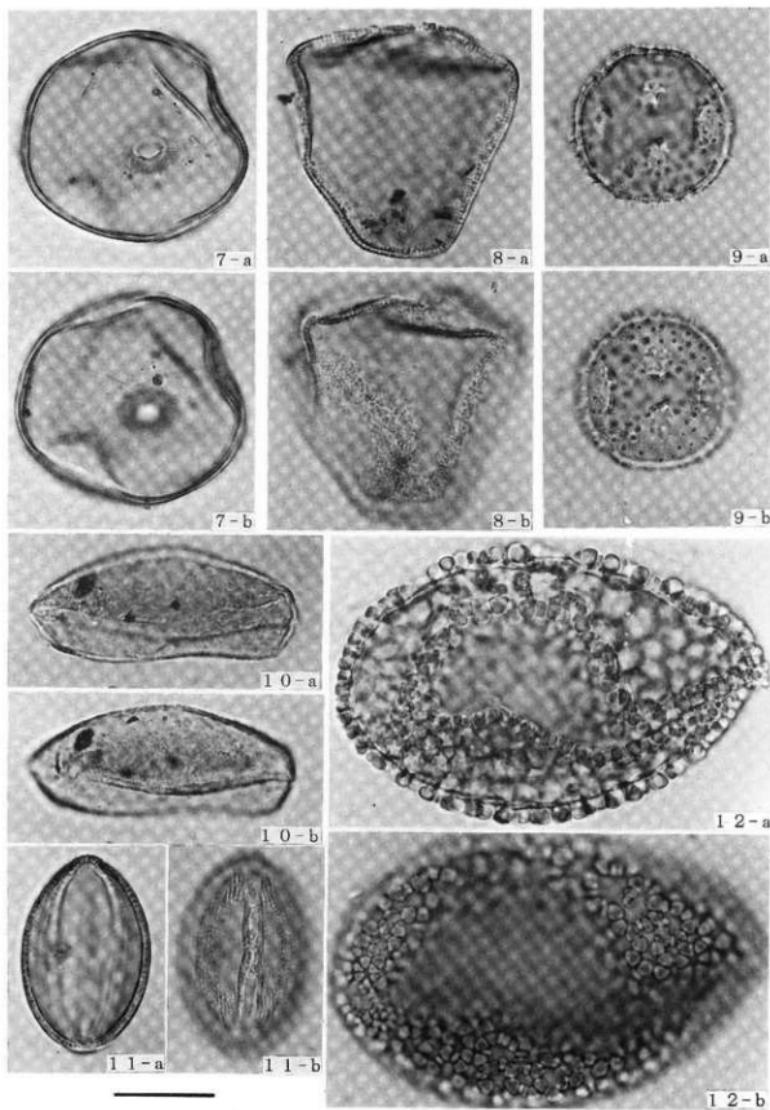
#### 引用文献

那須孝悌（1989）活動の舞台：概論、弥生文化の研究1 弥生人とその環境、雄山閣出版株式会社、p. 119-130.



図版1 東中筋遺跡の花粉化石 (scale bar :  $20 \mu\text{m}$ )

- 1 : スギ PLC.SS 3024 No. 3
- 2 : イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科 PLC.SS 3027 No. 8
- 3 : クルミ属 PLC.SS 3026 No. 8
- 4 : コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 3023 No. 3
- 5 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 3022 No. 3
- 6 : シイノキ属—マテバシイ属 PLC.SS 3019 No. 3



図版2 東中筋遺跡の花粉化石 (scale bar : 20  $\mu$  m)

7 : イネ科 PLC.SS 3025 No. 3

10 : ミズアオイ属 PLC.SS 3020 No. 3

8 : カヤツリグサ科 PLC.SS 3029 No. 9

11 : ゴキヅル属-アマチャヅル属 PLC.SS 3028 No. 9

9 : オモダカ属 PLC.SS 3021 No. 3

12 : ユリ科 PLC.SS 3030 No. 9

## 第5章 調査のまとめ

### 第1節 遺構の変遷

東中筋遺跡で検出した遺構を出土した遺物から時期別に分け、それぞれの時期の様相を概観し、遺構の変遷について考えてみる。

#### I期（繩紋時代晚期～弥生時代前期）

調査区中央で検出したS R 1は、河床において繩紋時代晚期～弥生時代前期の土器が出土した。繩紋時代晚期の土器はほとんどピローリングを受けていないことから、本遺跡では遺構が確認されていないが、周辺に生活域があると考えられる。同一土層から土器とともに木製農耕具が出土し、現状では水田は確認されていないが、生産域である水田の存在も考えられる。

弥生時代前期の遺構は、4基の土坑と柱穴がある。土坑はS R 1の南岸に沿って単独に点在する状態で検出された。土坑は椭円形を呈し、完形ないし完形に近い土器が出土した。土器の時期は前期末のものである。

#### II期（弥生時代後期～古墳時代）

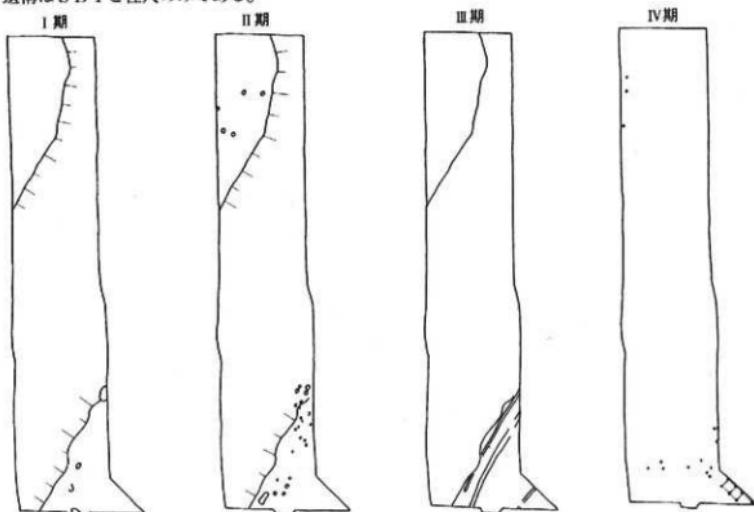
S R 1がほとんど埋没して、わずかな微高地となる時期である。遺構は北西部と南東部に柱穴が検出され、S R 1の南岸の第6・7層より多量の土器が出土した。自然科学分析ではこの時期は洪水や多雨により土地が不安定であったことが判明しており、生活域の中心はより安定した南側の微高地にあると想定できる。土層の観察によれば、第6・7層は土壤層と非土壤層に分けることができ、自然科学分析では第6～8層においてイネのプランツ・オバールが多量に検出されていることから水田であると考えられる。

#### III期（古墳時代後期）

S R 1は完全に埋没して平坦地となる。遺構としては、SD 1～3の溝である。SD 1とSD 2は平行して延びる溝で、芯芯間の距離は1.75～2.00mである。

#### IV期（江戸時代）

遺構はSB 1と柱穴のみである。



第33図 遺構変遷図 (S : 1/800)

## 第2節 SR1出土の木製農耕具について

本遺跡では、SR1の河床直上において平鋤（第30図）と泥除（第31図）の木製農耕具が出土した。同じ土柄から出土した土器の時期は縄文時代晚期～弥生時代前期であることから、この木製農耕具も当該時期のものである。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿原始編』（1993.3）の分類に基づくと、169は「曲柄平鋤CⅡ」、170は「Ia型」である。泥除の171は「泥除II式」である。

高松平野において、縄文時代晚期～弥生時代前期の木製農耕具を出土した遺跡は、「林・坊城遺跡」・「さこ・長池遺跡」と本遺跡の3ヶ所である。林・坊城遺跡ではSR01流路A下層から諸手鋤1点、鋤3点、えぶり1点、柄付半截木製品2点、小型鋤状木製品4点、柄3点が出土し、さこ・長池遺跡ではSR02の河床から小型鋤状木製品1点、割材4点が出土した。これら3遺跡の共通点は、旧河道の河床直上からの出土という点である。林・坊城遺跡とさこ・長池遺跡の小型鋤状木製品は同じ形態である。一方、本遺跡は平鋤と泥除の2種類であり、ともに高松平野では初めての出土である。

林・坊城遺跡と本遺跡においては、プラント・オパール分析ではイネのプラント・オパールが検出されているが、水田は確認されていない。その原因として林・坊城遺跡の報告書の中で、①集水域である河川内の堆積物は上流域からの流れ込みなどにより再堆積し、それに伴って遺物や微化石が移動すること、②河川の形成された時代や時期決定が難しいこと、③河川の下層に埋積する縄文時代晚期とされる黒色粘質土中では土壤学的一般に水田耕作が行われにくいためが挙げられている。一方、さこ・長池遺跡、さこ・長池II遺跡、弘福寺御讚岐国山田郡田園北地区、さこ・松ノ木遺跡では弥生時代前中期以前と考えられる水田が検出されている。これらの水田は形態・規模とともにほぼ同一であり、立地環境は埋没自然堤防上・後背湿地である。

これらの水田が縄文時代晚期まで遡ることが可能かどうかは、現時点では不明である。しかし、完成された水田形態と木製農耕具の器種構成から考えると、今後高松平野の同様な地形において縄文時代晚期の水田が検出される可能性が高い。

## 第3節 焼夷弾について

調査区中央やや北寄りにおいて、SR1を掘り下げている途中で焼夷弾の一部が出土した。出土したのは弾頭部おもりであり、直径37cm、厚さ5cm、重量約30kgを測る。焼夷弾のおもりは現在の地表面から約1mの深さままで埋め込んでおり、内側の平坦な面を上に向けた状態で出土した。高松市内ではこれまで焼夷弾は数カ所で見つかっている。この焼夷弾は、昭和20年7月4日の高松空襲の際にB29より投下されたものである。



6,600m

現水田耕作土



0 50cm

第34図 焼夷弾平・断面図 (S:1/20)

# 報告書抄録

ふりがな	ひがしなかすじいせき					
書名	東中筋遺跡 - 第1次調査 -					
副書名	都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次	第一冊					
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第57集					
編集者名	小川 賢・中西 克也					
編集機関	高松市教育委員会					
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel 087(839)2636					
発行年月日	平成13年12月28日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 34° 19' 14"	東経 134° 3' 14"	調査期間 H11.11.17 ~ H12.1.31	調査面積 1,245m <sup>2</sup>
東中筋遺跡	高松市 桜町 二丁目	37201				道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
東中筋遺跡	集落	縄文時代 ~ 弥生時代 古墳時代 江戸時代	土坑 柱穴 旧河道 溝 掘立柱建物 柱穴	縄文土器 弥生土器 木製品 土師器 須恵器	縄文時代晩期~ 弥生時代前期に かけての木製農 耕具	

都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第一冊

## 東中筋遺跡 - 第1次調査 -

2001年12月28日

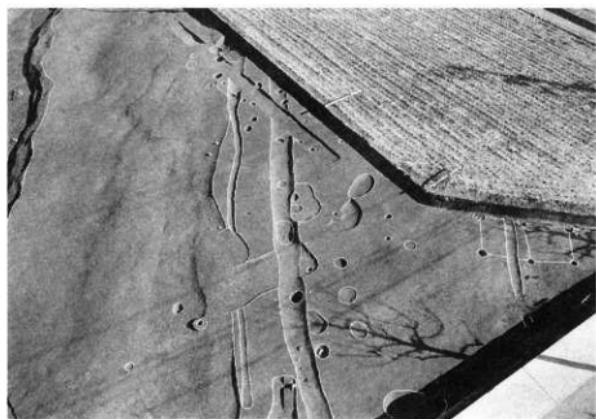
編集・発行 高松市教育委員会  
印 刷 (有) 河端商会



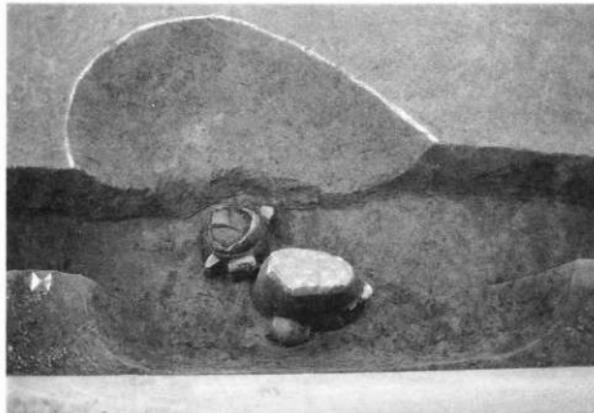
1. 空中写真



2. 完掘状況(南から)



3. 完掘状況(南から)



1. SK1



2. SK1 遺物出土状况



3. SK2



1. SK3



2. SR1



3. SR1



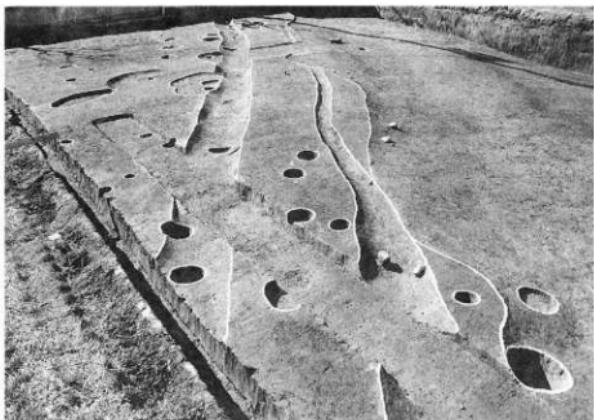
1. SR1 土層断面



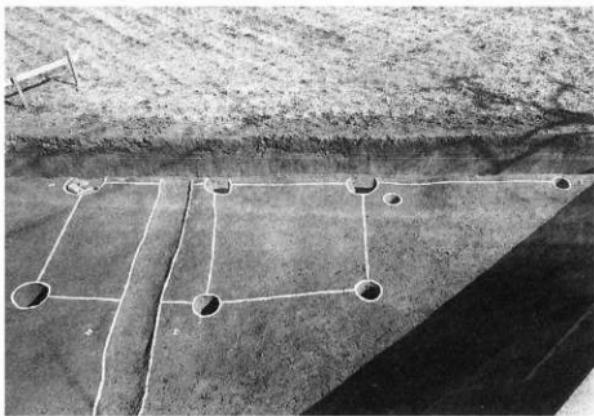
2・3. SR1 遺物出土状況



4. SR1 遺物出土状況



1. SD1・2



2. SB1



3. 烧夷弹出土状况



27



115



2



3



8



37



16



160



161



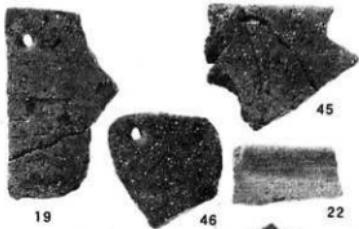
159



153



156



19

22

46

45

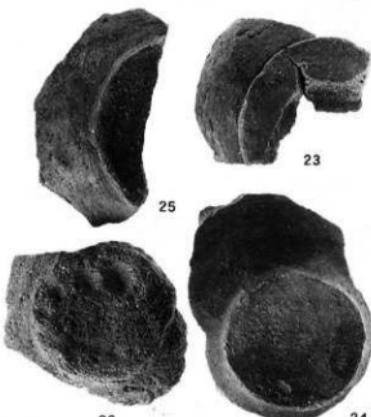


35

21

26

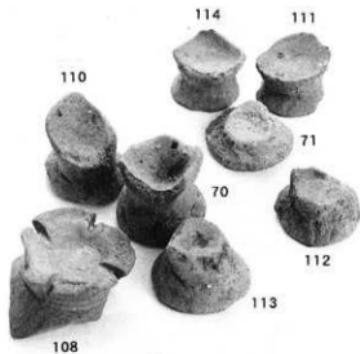
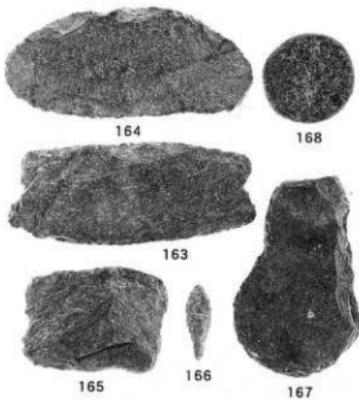
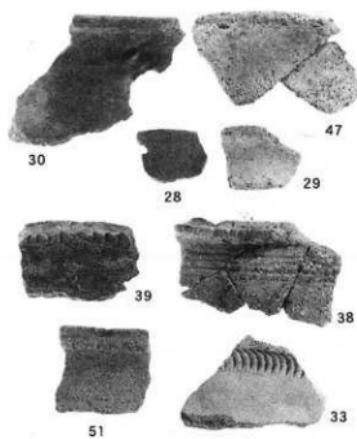
24

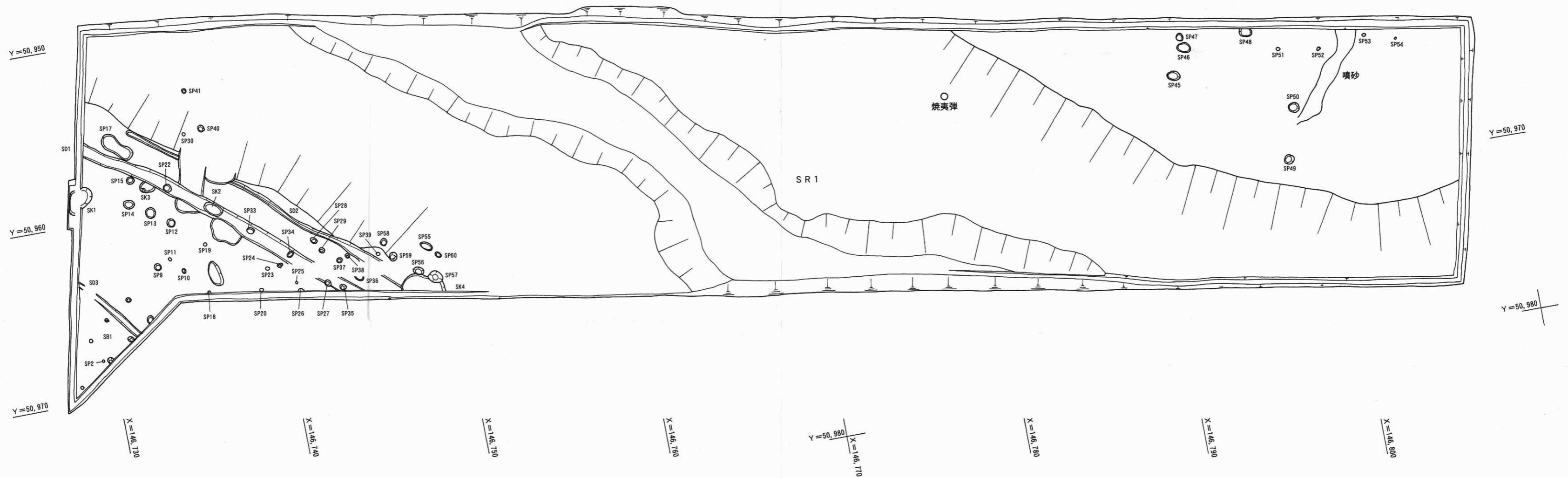


23

25

24





附図1 東中筋遺跡(第1次調査)遺構配置図(S:1/100)

高松市教育委員会